NARUTO　木ノ葉を照らす太陽

マイヤーズ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＡＲＵＴＯ　木ノ葉を照らす太陽

【Ｎコード】
Ｎ６５２９Ｋ

【作者名】
マイヤーズ君

【あらすじ】
木ノ葉が誇る上忍、うずまきナルト。彼は他国の忍からは「神風」として恐れられ、自国の者からは「太陽」と慕われる忍である。これは、彼が如何にして「太陽」と呼ばれるに至ったかを辿る物語。

第零幕（前書き）

警告

この小説の世界観はＮＡＲＵＴＯですが、別の漫画・アニメ・ゲームなどの地名・人物・術、技をＮＡＲＵＴＯ風にアレンジ（ＢＬＥＡＣＨの鬼道や斬魄刀の技などを忍術っぽく）したクロスオーバーでもあります。

またこの小説は、主人公性格改変の再構成物です。

注意点としましては、主人公はナルトですが、原作と大幅に実力、性格などが違うため半オリキャラ化しています。

ナルトは最強ではありませんが、あまり負けません。

ナルトの口調が原作と違い普通（？）です。

一応、原作沿いにする予定ですが随所にオリジナルの話などがはいります。

ナルトの歳が原作よりも一歳年上（ネジたちと同い年）などです。

オリキャラが出るかもしれません。

物語中の人間たちの考えは、作者の妄想です。

原作には無いオリジナルの設定。

術や世界そのものに関しては作者の独自解釈があります。

作者は完全なる中二病患者です。

ご都合主義バンザイ。

また作者の手元にＮＡＲＵＴＯの原作が無いためセリフなど原作と違う点があると思います。

上記の点を了承できない方はこの小説を読むことをお勧めできません。

第零幕

火の国、木ノ葉隠れの里。

世界に多々ある忍の隠れ里の中でも有数の力を持つとされる忍五大国の一角として、また数多くの優秀な忍が多くいる里として今も尚世界にその名を轟かせている隠れ里である。

しかし、木ノ葉には里以上にその名を世界に知られている忍が二人いる。　一人は木ノ葉の里長にして、五つの国の里の長のみが名乗ることを許される「影」の一人「火影」。

そしてもう一人は、一度戦場に出ればどんな劣勢であっても、自身が得意とする「風」を使うことで勝利を呼び込むため、他国の忍からは「木ノ葉の神風」と恐れられている忍・・・だが、彼のことをよく知る里の者ならば皆、きっと彼のことをどのような人物かと聞けば、その言葉は、たった一言で「太陽のような人」・・・と。

第零幕（後書き）

はじめまして、マイヤーズ君と申します。

この度こちらのサイトで小説を書かせていただきます。
作者は妄想は得意ですが、文才が無くそれを文章に起こすのはすこぶる苦手です。

また小説を書くこと自体初めてのド素人なので、改行がうまくいかなかったり、誤字、脱字が多く、何が言いたいのかうまく文章にできず、不快にさせてしまったり、混乱させてしまうこともあると思います。

至らない点が多々あると思いますが、長い目で見ていただけると幸いです。
完結目指して頑張ります。

幼少編　第一幕　密談

草木も眠る丑三つ時、木ノ葉にある火影の屋敷の一室にて三人の老人がロウソクの明かりのみで話をしていた。

「本当にいいのか？猿飛。」

三人の老人のうち、里のご意見番うたたねコハルが聞いた。

「左様、あの子の事に関しては、お前が一番執着していただろうに・・・それにあの子がいなくなれば里の者がまた騒ぐのではないか？。」

同じくご意見番のひとり、水戸門ホムラも確認するかのように聞いた。

「だからこそじゃ・・・」

そして最後の一人、現木ノ葉の里長「三代目火影」猿飛ヒルゼンが二人に、そして自分自身に言い聞かせるようにつぶやいた。

「わし一人の力では、あの子を守ってやることができん。それに一時的にでもあの子が里から居なくなれば、里の者も憎む対象が消え本当の意味で四代目の意思を考え理解できるかもしれん・・・わしはそう考え信じておる。とにかく今は里の者たちにも一度じっくり考える時間が必要じゃ。それにあの子にも見せてやりたいんじゃよ、世界はこんなにも広く大きいものだと、この里だけが世界では無いとな。」

「恨まれるかも知れんぞ、里の者にもあの子にも・・・」

コハルがどこか寂しそうにつぶやく。

「かまわぬ、わし一人が恨まれる程度であの子と里の者が幸せになれるのならば。」

三代目もまた、同じように寂しげに話す。

「・・・・わかった・・・・里の長はお前だ、わしらはあくまでご意見番、決定権は「火影」であるお前にこそある。わしらはそれに従うだけじゃ。」

呆れと諦めが混ざった声でホムラは了承した。

「仕方がないな、昔から一度言い出したら意地でも考えを曲げんからのぅ、お前は。」

コハルがため息をつきながら言う。

「すまんの、二人とも。
だがこれは火影としてでは無く、わしの独断で決めたことじゃぞ。」

「勘違いするな、お前一人では無い。わしら三人で決めた事じゃ。」

三代目が申し訳なさそうに謝るが、この依頼は自分が勝手に決めた事だと言う。

しかしコハルたちは自分たち二人も同意したので三人だと言い、ホムラも頷いた。

「そうと決まれば、すぐに手紙を書いてあの二人に送らねばなるまい。」

ホムラが重い腰を上げて便箋を取りに行く。

「しかし、あの二人がこのような依頼うけるのか？」

コハルが疑うような目で三代目を見る。

「ホッホッホッあ奴らなら引き受けてくれる、少なくともわしは確信しとるよ。」

三代目が先ほどとは打って変わって、楽しそうにそして自身たっぷりに言う。

「なにせ、わしの弟子じゃからの。」

コハルは再び深いため息をついた。

幼少編　第一幕　密談（後書き）

第一話ですがいきなりオリジナルな上に話が前にあまり進んでませんね、ごめんなさい。

原作が始まる地点までまだ少しオリジナルの話があり、時間が掛かりますが気長にお待ちいただければなぁと思います、ホントすいません。

次回は、あの二人（＋一人）とようやく主人公が出ます、お楽しみに？。

幼少編　第二幕　再会

日が沈みかけこれから夜に差し掛かろとしている時刻、木ノ葉隠れの里に向かう一本の道を一人の男が歩いている。

その男の容姿は１９０を超えるであろう長身に、長い白髪を一本に束ね腰に巨大な巻物を携え、まるで歌舞伎役者のような化粧をしており「油」の文字が描かれた額当てをしている。

知らぬものが見れば、十人中十人が怪しいと思うだろう。

しかし、忍の世界に属する者ならば彼の名を知らぬ者はいないほどの人物である。

彼の名は「自来也」忍五大国の一角である、木ノ葉隠れの里長「三代目火影」の弟子の一人であり、過去に木ノ葉を襲った九尾襲来事件の時にその命と引き換えに九尾を封印した「四代目火影」の師でもある。またかつては「伝説の三忍」としてその名を世界に知らしめた生きる伝説である。

「イヤ～～！照れるのぉ～。」

・・・少々調子に乗りやすいのが玉に瑕、あと紹介文に反応しないでください。

「おぉっ！前方に女子二人発見っ！！（五十メートルほど先の・・・）こんっな時間に二人だけで旅とは、盗賊にでも会ったらどぉ～するんじゃっ！　ここはわしが人肌脱がねばのぅ！！」

・・・訂正・・・調子に乗りやすくまた「女子」に目が無いのが玉に瑕。

「ぬふふふ～、うん？・・・なっっっ！！！」

これから目の前の女子たちにどのように声をかけ、その後のお礼にまで妄想を膨らませていた自来也だったが、二人の姿がはっきりと見えたその瞬間、今まで考えていたことがすべて意味が無くかつ実現不可能であることを知る、なぜなら彼女たちならば、むしろ盗賊たちの方が裸足で逃げ出すことを彼は知っているからである、それもかなり昔から。

「はぁぁぁ～・・・」

情けないため息をつきながらも、せっかく古い友人にそれもお互いの故郷の近くで会ったのだから挨拶も兼ねて自来也は二人に近づいた。

「たくっ！一体何の用なんだろうねぇ、急に呼び出して・・・もう少しでアタリが来ると思ったのに！！！」

二人の女子のうちの一人が怒ったように言う。

彼女の名は「綱手」木ノ葉隠れの創設者である、初代火影の孫であり自来也と同じく「三代目火影」の弟子の一人で、「伝説の三忍」の紅一点である。またその他にも「医療忍術のスペシャリスト」「伝説のカモ」の異名を持つ。

さまざまな意味で「最強のくノ一」。

「まぁまぁ、いいじゃないですか。せっかく久しぶりに三代目様から依頼が来たんですから、里帰りも兼ねて・・・ねぇ。それに手紙には木ノ葉へ帰る旅費まで入っていたんですから、無碍にはできませんよ。（それに、綱手様の「アタル予感」は当たった試しが無いですからねぇ）」

もう一人の女子が窘める様に言う。

彼女の名は「シズネ」綱手の一番弟子であり、付き人のようなこともさせれらる、ちょっとかわいそうな苦労人である。（ちょっ！私の紹介文これだけ！？）・・・だから紹介文に反応しないでください。

「（こいつ、なにか失礼なこと考えてるなぁ？後で問い質してやるっ）ふんっ！！何が依頼だっ！今まであの爺さんの依頼でまともな物があったか？！今回も絶対に面倒事に違いない、どんな依頼であれあたしは一切引き受けないよっ！」

綱手が言い切ったすぐ後に、二人の背後から声がかかる。

「やれやれ、相変わらず怒りっぽいのぅ、お前は・・・」

「・・・？、ッッッ！お前はっ！自来也っ！！！」

「自来也様っっっ！！！」

「久しぶりだのぅ、綱手。」

ここに、伝説の三忍のうち二人が再会した。

・・・・・・・（あれ？私はっ！？）・・・シズネの苦労は続く。

幼少編　第二幕　再会（後書き）

え～～～前回のあとがきで主人公も出るって書いたんですけど・・・、すいません次回には必ず出しますから（汗）もう少々おまちください。

シズネさんには軽くギャグ要員になっていただきました、シズネさんファンの方ごめんなさい。

今回ギャグを少し取り入れてみたのですが、読み返してみて自分のギャグセンスの無さに（文才も・・・）改めて打ちひしがれています、やはり上達には書きまくるしか無いのでしょうか、まだまだ未熟者ですが頑張ります。

次回こそは、次回こそは必ず主人公を・・・！！

幼少編　第三幕　出会い

木ノ葉に続く道で、二人の生きる伝説が数年ぶりに再会した。

「しかし、お前はいつまでも変わらんのぉ。」

自来也が、昔と変わらない容姿の綱手を舐めまわすように見る、そして彼女の豊満な胸に視線が定まる。

「ふんっ！そう言うお前こそ、見た目は老けたがそのいやらしい目つきは、変わってないねぇ～」

綱手が、半分呆れ半分怒りの顔で言う。

「綱手様、久しぶりに会ったのにその言い方は・・・（汗）」

シズネは、自分の師と同じくらい忍として尊敬している自来也に対して、綱手の言葉にオロオロする。

「な～に言ってんだい！この男にはこのくらいの挨拶で十分さっ！」

「その口の悪さも、相変わらずだのぅ～」

「余計なお世話だよっ！まったく」

（このやり取りも懐かしいのぅ）

自来也は性格も昔と変わらない友人に笑みを浮かべた。

「それより、自来也様は一体どうしたんですか？たしか「大蛇丸の監視」を、三代目様より仰せつかっていたはずでは？」

シズネは、「大蛇丸の監視」という重大な任務を受けているはずの自来也がここにいることに対し、疑問を感じた。

「実は、三代目より「急ぎ里に戻り依頼を頼みたい」という便りが五日ほど前に突然届いてのぅ、監視を一次中断し木ノ葉に行く途中でお前たちを見つけたんじゃ。」

自来也が懐から、封筒を取り出し二人に見せる。

「何？！お前もかっ！！」

綱手が心底驚いたように言う。

「「お前もか」とは、どういう意味じゃ？」

自来也が不思議そうに聞く、それに対しシズネも袖口から自分のと同じような封筒を取り出した。

「実は、私達のところにも同じような内容の手紙が三代目様より届いたんです。それも、同じ五日ほど前に。」

「ご丁寧に、余るほどの旅費も同封されてな。」

二人が木ノ葉に向かう理由が自分と同じであることを知り、自来也はただでさえ妙だと思っていた手紙に対し、ますますおかしいと思ったがこの謎は三代目本人に聞けばいいと結論づけ、それならばと二人にある提案をする。

「・・・綱手、木ノ葉へは三人で行かぬか？お互い三代目に呼ばれた者同士で。」

「なんでわざわざお前なんかと・・・」

綱手は嫌そうに言う、だが。

「良いじゃないですか綱手様、お互い向かう場所も一緒なんですし。」

ここでシズネが自来也の援護に回る。

「ちっ、しょうがないねぇ。」

綱手は二対一で分が悪くなり渋々一緒に行くことに同意した。

「よしっ！では行こうかのぉ！」

既に日は沈み、月明かりがあたりを照らす時間、三人は木ノ葉の火影邸の前に来ていた。

「あの～お二人とも、もうかなり遅い時間なので今行くのは大変失礼なのでは・・・（汗）？」

シズネはこんな時間に尋ねるのは良くないのでは？と二人の顔色を伺いながら聞いた。

「早く来いと言ったのは向こうなんだ、わざわざ遅れて行く必要もないだろう、それに窓が空いてるからきっとまだ屋敷内に居るはずだよ。」

綱手は屁理屈のようなことを言いながら、中に入っていく。

「しかも、三代目は今も先の事件のせいで、里の復興に追われているはず、いくらワシらでも明日の朝に来たとて追い返されてしまうかも知れんぞ？」

そんなことあるわけ無いのだが、自来也も尤もらしいことを言ってズカズカと中に入っていく。

「ああっ！お二人とも待ってくださいっ！！」

・・・結局シズネも二人の後を追いかけて中に入ってしまう。

三人はとりあえず、代々火影が使っている仕事部屋を目指す。

「ところで、もし三代目様がおられなかったら、どうするんですか？」

「そしたら、また明日来ればいいだろう？」

さっきと言ってることが違うと思いながらも、自分の師は昔からこういう人だと諦めるシズネ。

そんなこんなで、仕事部屋の前に着いた三人、念のため綱手が部屋の扉をノックするが返事はない。

しかし中に人の気配を感じた綱手は、部屋の主の許可も無く扉を開けてしまう。

さすがに、これはいけないと思ったシズネが綱手に注意しようとすると、屋敷に入る前から開けられいていた窓から「風」が入り、三人は顔を手で覆った。

不思議なことに、その「風」は既に沈んだはずの「太陽」の匂いがした。

三人が目をあけると部屋の電気は点いておらず、本来なら扉の方を向いているはずの火影用のイスが窓の方を向いていた。

もしかしたら、三代目がうたた寝をしているのかもしれない、そう思った綱手と自来也は部屋に入りイスの方へ歩いていく。

シズネもそれを見て（後で怒られるかなぁ）と思いながらも、二人にならって部屋の中へ入る。

座っているであろうこの部屋の主の顔を見ようと三人はイスの前へ回り込む、しかしそこに座っていたのは、自分たちが予想していた人では無かった。

そこには、「太陽の光」をそのまま吸い込んだかのような、金色の髪を持つ「子供」が月明かりに照らされ眠っていた。

幼少編　第三幕　出会い（後書き）

主人公初登場！！・・・セリフも無い上に寝てますけどね・・・すいません（オレ、謝ってばっかだなぁ～（泣））次回には、ある程度喋らせるつもりなんで（汗）。

そういえば、前回から口調の違うキャラが一気に三人も増えたんで、誰がどのセリフを言っているのか解りずらいかもしれません、一応セリフの前後にどのキャラがどんな風に喋っているのか書いてるんですよね。

作者の手元に漫画が無いのでそれぞれの口調はアニメを見て音で聞いた印象をそのまま文字にしてるんですけど・・・これからどんどんキャラが増えていくから、喋り方だけでどのキャラか判断できるように書ければいいんですけど、自分の腕でできるのかなぁ～。

まあ、とにかく少しでも解りやすく書けるように精進します、これからもよろしくお願いします。

幼少編　第四幕　依頼

三人は静寂の中しばし、時を忘れて目の前の「子ども」に見入っていた。

「おい、起きろ」

しかし、その静寂を破るように綱手が子供を起こそうとする。

「綱手様、せっかく気持ち良さそうに眠ってるのに、起こすのはかわいそうですよ。」

シズネは子供を起こすのを止めようとするが。

「知ったことか！それに子供がこんな時間にこんな場所で寝てるなんておかしいじゃないか、この子を起こして話を聞くのが自然じゃないのかい？ホラ！はやく起きなっ！あたしは気が長い方じゃないんだよ。」

綱手は尚も子供を起こそうと声を上げる、すると・・・。

「う・ん・・？」

いままで瞑っていた目が開かれ、その目は「青空」を思わせる明るい色をしていた。

「よしっ起きたな！じゃあとりあえずお前の名前はなんだ？」

「・・・？」

綱手は子供から話を聞くためにまず名前を尋ねたが、まだ寝ぼけているらしく目を擦っている、そしてようやく三人の姿を見つけやっと話ができると思っていると・・・。

「ヒッッ！！！！！！！」

突然顔が恐怖に染まり、イスから飛び降り部屋の隅に逃げてしまう。

「ごめんなさいっ！ごめんなさいっ！ごめんなさいっ！！」

ただでさえ小さい体をより小さくし、涙を流しながら何かの呪いのように同じ言葉を震えながらつぶやいている。

これには三人とも困惑したが一番驚いているのだった綱手だった、たしかに自分はこの子を起こすために少しばかりきつい言い方をしたが、まさかここまで怯えられるとは思っていなかったからだ。

「だ、大丈夫だよ、あたしは別に怒ってたわけじゃないから・・・」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！・・・」

綱手は子供に謝るが一向に泣きやまず、三人はどうしたらいいのか途方に暮れていると・・・。

「お前たち、こんな時間になにをしておる。」

いつのまにか三人の後ろには、綱手と自来也の師であり現在の里長である「三代目火影」が立っていた。

「？・・・！お前たち、この子に何かしたのかっ？！！」

三代目は三人の先に居る者を確認すると、その顔が怒りに染まっていくのがわかった。

「ご、誤解です！私たちはこの部屋で眠っていたこの子に話を聞こうと、起こしただけで・・・」

これにはたまらずシズネが反論するが、疾しいことをしてしまった自覚があるので語尾がだんだん弱くなる。

「・・・そうか・・・」

そう言って三代目はいまだに泣いている子供に近づき、小さな背中をさすりながら、やさしく声を掛ける。

「大丈夫じゃ、この者たちは決してお前を傷つけぬ、わしが保証する。」

すると子供は顔を上げ、先ほどまで流れていた涙はもう姿を消していたが代わりに三代目の後ろに隠れるようにして、こちらをじっと見つめている、しかしその瞳は先ほどの「青空」のような明るい色では無く「深い海」のような暗い色をしていた。

「どうした、猿飛。」

「こんな時間に大声をあげて。」

すると、木ノ葉のご意見番である「水戸門ホムラ」と「うたたねコハル」がいた。

「おお、お前たち来ておったのか、よく戻ってきてくれたな。」

ホムラが三人の姿を確認し、戻ってきたことを喜んだ。

「ちょうどよかった、ホムラよこの子を寝かしつけて来てはくれんかの、もうかなり遅い時間なのでな。」

三代目がホムラに頼む。

「わかった・・・まったく何処にいたのか探したぞ、さぁ行こうか「ナルト」。」

「「「ッ！！！」」」

その名を聞いた瞬間、三人は一斉に子供の方を向いたが既にホムラと子供はそこには居なかった。

「三代目様、あの子供はもしやっ！」

「シズネ、その話は後でする。それより今はお主たちがなぜこのような時間にここにいるのか、話してもらうぞ。」

シズネが先ほどの子供について聞こうとしたが、コハルに遮られてしまった。

「なるほど、お主たちがなぜここに居るのかはわかった。だが、い

くらお前たちでも、勝手にわしの仕事部屋に入るのは関心せんな。」

「す、すみません・・・」

その後、シズネは三代目とコハルになぜ自分たちが火影の仕事部屋に居たのかを話した。

「ハッ！年寄りは一々細かいことを気にするねぇ。」

「綱手、初代様の孫であるお前が自分の師であり、里の長でもある三代目になんと言う口をきくか！」

「だから！爺様とあたしは違うって、何度言えばわかるんだい！！」

綱手とコハルは、昔から会えば必ず口げんかをしていたが、久しぶりに会ってもそれは変わらないらしい。

「そんなことよりっ！今はあの子のことについて聞きたい。」

それまでずっと沈黙を続けていた自来也だったが、ついに二人の口げんかに我慢が出来なくなり、二人の会話に無理やり入ってきた。

「あの子は本当にあの「うずまきナルト」なのか？」

自来也はできれば違ってほしいと思っていた、自分の弟子の子供があんな暗い目をしているとは思いたくなかったからだ。

「ああ、あの子の名は「うずまきナルト」じゃよ。」

しかし、現実は非常だった。

「なぜだ、なぜあの子はあんな悲しい眼をしている、あの子はこの里の「英雄」になるのではなかったのか？」

そう、ナルトは「木ノ葉の英雄」になるはずだった、それが四代目の願いだと、彼の死に目にあった三代目より聞かされた、しかし、あの子の怯えた表情はとても「英雄」として迎えられているとは思えなかった。

「たしかにナルトは「木ノ葉の英雄」じゃ、それは間違いない。しかし里の者たちは「あの子の中に居る存在」とナルトを同一の物としてしか見ておらんのじゃ、結果ナルトは里の者たちに何度も「命」を狙われ、あのような眼をするようになってしまった。」

三代目はつらそうにそして何より哀しそうに、自来也の疑問に答えた。

「そんな！」

シズネはいくら自分たちにとって憎い存在があの子の中に入っていたとしても自分の故郷の人間が、幼い子供の命を狙っていたことに、ショックを受けた。

「くっ！」

三代目の答えに対し自来也も、悔しそうに顔を歪めた。

「・・・あの子のことも気になるが、そろそろ話してはくれませんか？猿飛先生、あたしと自来也への依頼とは、何ですか？」

綱手が先ほどとは打って変わって真面目な顔で聞く。

「「お前たち二人に依頼を頼みたい」とは、一言も言っておらんのに、なぜお前はわしが「二人」に頼みたいと言うと思ったんじゃ？」

「あたしは兎も角、自来也には「大蛇丸の監視」を命じていたはず、その自来也とあたしを同時に里に呼び戻し「任務を頼みたい」と言うことは、あたしと自来也「二人」でなければできない依頼だと判断したからです。」

綱手は「伝説の三忍」の名に恥じない洞察力で、三代目の依頼は「自分と自来也の二人で共同して行え」と言うことではないのかと、自分の予測を話す。

「たしかに、わしはお前たち「二人」に同じ依頼を頼みどちらかでも引き受けてくれればと思っていたが・・・さすがじゃのぅ、綱手。」

三代目は自分の弟子が相変わらず優秀でうれしそうだった、そして。

「単刀直入に言う、お前たち二人に頼みたい、ナルトを連れて木ノ葉の外へ旅に出てくれんか？」

三代目の依頼は三人の予想を超えた物だった。

幼少編　第四幕　依頼（後書き）

ようやくナルトの名前をだせました！まだセリフも少ないですけど、これからだんだん増やしていきます。

え～～、いまさらですが、この小説の中で「　」この中にはセリフと、この話の中で僕が思う重要なフレーズを入れてます、読みにくいかもしれませんが、僕はこのスタイルで行きたいと思います。

幼少編　第五幕　想い

三代目の依頼とは、「ナルトを連れて木ノ葉を出ろ」というものだった。

この依頼に対し一番最初に疑問をぶつけたのは綱手だった。

「それは「ナルトが邪魔になった」ということですか？」

「そうでは無い、もしナルトがこのまま里に居れば里の者たちは今後もナルトに危害を加え続け、最悪殺してしまうかもしれん、其れ程までに里の者たちが持つ「九尾」に対する憎しみは強いということじゃ。

今の所は、わしが定めた「九尾の妖狐の事を他言しないように」という法を皆守っておるが、これを破ろうとする者も少なくない。「九尾」の事はいずれナルトに知られるじゃろう、しかしこの問題はナルト自身が乗り超えていかなくてはならん事じゃ、じゃがまだその時ではない。」

「それにもし三代目が定めた法を破れば、わしらはその者たちを罰しなければならない、唯でさえナルトの命を脅かす程の危害を加えた者には重い罰を与えているのに、これ以上の罰を与えれば、里の秩序は乱れ、ようやく取り戻しつつある安寧を失うやもしれん、それだけは絶対に避けねばならぬ。」

綱手の疑問は三代目により即座に否定され、ナルトの安全が第一であり「九尾」についてもまだナルトに知られるのは良くないと言う。

同時にコハルもナルトが居ることで「里、其の物の平和」が崩れる

と言い、それは何としても阻止しなければならないと言う。

しかし

「でも、三代目様は仰っていましたよね？「里の者は皆家族」だと、お二人の話しを聞いているとまるで、里の人たちのために、ナルト君一人を追い出そうとしているように感じます。　ナルト君の「故郷」はこの里では無いのですか？ナルト君は「家族」では無いのですか！？」

シズネは涙ながらに三代目たちの考えは、昔、自分が小さい頃に教えられた歴代のそして現在の火影たちの考えとは違うのではないかと訴えた。

だが。

「「家族」・・・だからじゃよ。」

「え？」

「わしは、里の者も、そして当然ナルトも皆「家族」だと思うておる、しかし里の者たちはナルトの事を「家族」とは思うてくれなんだ、わしはそれが何よりも悲しい、ましてや「家族」が同じ「家族」を殺そうとするなど言語道断じゃ。」

「だからこそ、そんな事態を防ぐため、そして何よりナルトを本当の意味で「家族」として木ノ葉に迎えるためには、一度じっくり考える「時間と切っ掛けが必要」だと猿飛は言いたいんじゃ。」

三代目が自分の考えを途中まで言った後、先ほどナルトと共に出て

行ったホムラが帰り、三代目の言葉を引き継いで話した。

「おぉ、ホムラ帰ったか・・・ナルトの様子はどうじゃった？」

「少しこ奴らのことを気にしておったが、すぐに眠ったよ。」

「そうか、それはよかった。」

三代目がナルトの事を聞き、ホムラは「こ奴ら」の所で自来也たちを見て、眠った事を話すと、コハルが安心したように笑みをこぼす。

「ところで・・・一つ聞きたいんだが。」

「なんじゃ、綱手。」

綱手が三人に再び質問する。

「まだこの依頼受けるとは言っていないが、もし受けたとして、あたしも自来也も普段から決して安全とは言い難い生活を送ってる、そんなあたしたちにあんな小さな子供を預けて何かあってもいいのか？
それにあたしたちがあの子に危害を加えないという保証は無いんじゃないのかい？
そもそも、あたしたちに子育てができるとでも？」

「綱手様！！まさかこの依頼、断るんですか？！！」

シズネが「信じられないっ」と言った顔で綱手を見る。

「たしかに、それが心配の種ではあるが・・・正直、今の木ノ葉も

ナルトにとって安全とは言えん、それにお前たちなら何かあってもあの子を守ってくれるじゃろ？
それとも、お前たちも里の者たちと同じように、ナルトと「九尾」を同一視しておるのか？」

「はっ！！見くびるんじゃないよ！あの子と「九尾」が別者だってことくらいわかってるさ！」

綱手は自分たちに預けるのは、却って危険ではないのかと聞くが、三代目の答えは自分たちに預けた方がむしろ安全だと言い、逆にこちらもナルトと「九尾」を同一視しているのではないかと聞かれたが、その問いは自分をバカにしてるのかと思い答えはＮＯと言ってやった。

「なら問題は無いな、子育てに関しては既に一番大変な赤子の時季は過ぎておる、教育などは、アカデミーの教科書を渡すからそれを読ませていれば大体のことは解るじゃろ、それにお前は兎も角、常識などはシズネが教えれば問題無かろう。」

「なっ！」

これには、頻りにシズネも頷いている。

正直な話、綱手は今回の依頼を聞いた時、断ろうと思っていた、たしかにナルトの事はかわいそうだと思った、里のためとは言え有無も言えぬ状態の時に「化け物」を封印され、まるで生贄のようだとも思った、しかし自分の性格上、子育てが勤まるとは到底思えないし、いくら自分の弟子が優秀でもこれは荷が重いと思ったからだ（尚その弟子はかなり張り切っているが・・・）
だからこそ自分たちに預けるのは危険だと言って、三代目たちの考

えを改めさせるつもりだったが、却って墓穴を掘ってしまった。
綱手がどうやってこの依頼を断ろうかと考えていると、不意に自分の隣で先ほど一言二言話しただけで、それ以降まったく口を開いていなかった自来也が目に入り、こいつも依頼を断り自分も断れば、三代目たちも諦めるだろうと思い、話を振った。
「なぁ、自来也お前も子育てなんて無理だろ？それにお前には「大蛇丸の監視」があるじゃないか、いくらあたしたち三忍でもな・・・」
「・・・・・一つだけ聞いておきたい。」
「なんじゃ？」
自来也が先ほどの綱手と同じように、三代目たちに聞く。
「もし、あの子が旅の途中、「忍」に成りたいと言ったらどうする。」
「・・・そこはお前たちの判断に任せる、「忍」に成りたいと思うかどうかはあの子の自由じゃからな、じゃが、もしナルトが本気で「忍」に成りたいと言ったなら、鍛えてはくれんかの、お前たちの手で。」
その言葉を聞くと、自来也は暫しの間眼を閉じ考える。
「お、おい、自来也？」
綱手がもしやと思い話しかける、すると自来也は閉じていた眼を開

けた、その眼には「決意」が宿っていた。

「案ずるな綱手、少なくともお前が育てる必要は無い。」

「お前っ！まさか！！」

「この依頼、わしが引き受ける！！！！」

物語の歯車は今、動き出す。

幼少編　第五幕　想い（後書き）

次回からようやく、ナルトがメインの話になると思います。

自分で書いてて何ですけどかなり支離滅裂な文章に成ってると思います、それぞれの人に一つ一つ考えや意見があって想いもあるんですけど、僕の腕が無いせいか、それを文章にするとなんだか変な感じに成っちゃって、言いたい事がうまく伝わらないかもしれません。

もし自分の満足のいく表現やセリフを思いついたら、少しずつ修正していければいいなぁと思います。

幼少編　第六幕　消失？

三代目の依頼をどう断ろうかと考えていた綱手だが、隣に居た自来也が突然引き受けると言い出した。

「「引き受ける」って、本気かい！？自来也！」

「ああ、本気だ。」

綱手は自来也に本気かと尋ねると、自来也は迷い無く答えた。

「しかし、お前は「大蛇丸の監視」も命じられているはずだろう？それなら危険な場所に行くことも多いはずだ！そんな所に子供を連れて行く気かい！？ましてや育てながらなんて・・・」

綱手は子供を育てながら大蛇丸の監視には危険が付きまとい、暗に無理だと言う。

「心配するな綱手、最近は大蛇丸もワシが嗅ぎ回ってる事に気づいて大分大人しくしておるし、三代目たちが言ったように子供一人守る事などワシにとっては造作も無い。
ただ、もし長いことワシがあの子を守れない程の場所に赴く事があれば、その時はお前か「あの場所」に預けようと思うておる、その時は頼まれてはくれんかのぅ。」

自来也は、大蛇丸も最近は大人しくなり大丈夫だと言い、逆にこちらにも頼み事をしてきた。

「あ、ああ別に構わないが・・・って、まさか「あの場所」って「

梁山泊」の事か！？それにお前一人で育てるんじゃ無いのかっ！？」

「基本的には旅をしながらワシが面倒を見るつもりだが、ワシ一人では教えてやれる事にも限界がある。
だが、お前や「梁山泊」に住む御仁たちならばワシが教えてやれない事もあの子に教えてくれるだろう、あの子の成長の為にも、手伝ってはくれんか？」

「たしかに「梁山泊」に住む者たちならば、お前が教えてやれん事も教えてやれるだろう、それにあたしも教える事自体は吝かではない。
しかし、あそこの連中も「九尾」とあの子の関係性はしっているはず・・・あたしは兎も角、あの連中があの子と「九尾」を同一視しないとは限らない、もしかしたらあの子の事を殺すかも知れんぞ？」

「綱手、お前なら知っているはずだ・・・あそこに住む御仁たちはどの様な者であろうと一個人としてしっかりと見ている、少なくともあの子と「九尾」を同一になど見ないはずだ。」

「なるほど・・・確かにな。わかったよ、お前が面倒を見るならあたしは別に文句は無いし、多少の期間であれば預かってやるよ、ただし、あたしが用意してやるのは寝床と食事くらいだ、それで良ければあたしも手を貸してやる。」

「それだけして貰えれば十分だ。」

「私もできるだけお手伝いします！」

綱手は「梁山泊」という所にナルトを預けて大丈夫か、と聞くが自来也はそこに住む者たちを心底信用しているようで、大丈夫だと言

う。　数回しか会ったことは無いが、たしかにあの者たちならば信用できる、綱手もこれには同意し、ナルトを偶になら預かる事も了承した、またシズネもできる限りの事をすると約束した。

だが、綱手には少し気に掛かることがあった。

「しかし自来也、お前まさかとは思うがあの子と「ミナト」を重ねてるんじゃ無いだろうね？それに「九尾」の事も。」

「見損なうな、あの子と「ミナト」が違う事くらいわかっとる。ついでに言っておくが、ワシもお前と同じ意見だ、あの子と「九尾」は、まったくの別者だ。」

「ふっ、そうか・・・」

綱手は自来也の答えに満足したように笑う。

「あのぉ～所で、ナルト君はこの話を知っているんですか？」

シズネがナルトにこの件について知っているのかと聞く。

「そうだよっ！まさかナルトの意見を無視して勝手に旅に出そうとしてたわけじゃ無いだろうね？」

綱手も「もしそうならぶん殴る」と言う体制で答えを待つ。

「無論伝えてある、お前たちに手紙を出す前にな、寧ろナルトは行きたいと言っておったぞ。」

この答えに綱手とシズネは安心したが、自来也はどこか違和感を感

じた。

「うん？・・・じゃあ初めから、あたしたちには拒否権は無かったのかい！？」

「ホッホッホ！もし二人とも断られたら、どうしようかと思ったわい。」

三代目が先ほど別にイタズラが成功したような、そんな顔を見せる。

自来也が先ほどの違和感について考えていると、窓から朝の日の光が差し込んできた。

「もぉ朝か・・・随分と長く話しこんでしまったのぉ。」

三代目が窓に近づきながら、目を細める。

「しかた無いですよ、ナルト君の一生を左右するかも知れない話し何ですから、むしろ一晩で話しがついた事に驚きです。」

「たしかにな。」

シズネと綱手は疲れたように漏らした。

「少し早いが、ナルトを起こしてくる、この事も早く伝えてやらねばな。」

ホムラがナルトを起こしに再び部屋を出る。

「自来也、どうした？先ほどから何か考え込んでいる様じゃが。」

三代目が心配そうに聞く。

「・・・いや、ナルトが「旅に行きたい」と言ったのが引っ掛かりましてのぅ。」

自来也が尚も考えていると。

「たっ大変じゃ！！」

ホムラがあわてた様子で部屋に入ってきた。

「どうしたんじゃ！」

三代目がホムラに駆け寄り聞く。

「ナルトがっ！ナルトがおらん！！！」

「何じゃとっ！！！」

ナルトは何処に・・・。

幼少編　第六幕　消失？（後書き）

え～～～また嘘をついてしまいました・・・ナルトをメインにする予定だったのですが思いのほか長くなってしまいこのような結果に、何度も言いますが次回こそはっ！

今回もかなりめちゃくちゃな感じに成ってしまいましたね。正直、僕自身も納得してなかったり矛盾を感じてしまう所が多々あるんですが（作者がこんなこと書いてはいけない！）僕の文才ではこれが限界です、すいません。

ネタバレ注意！！！

今回の話で初めて他漫画のワードが出てきました、その名は「梁山泊」です、御存じの方も多いでしょうが、これは「史上最強の弟子　ケンイチ」に登場する「武の達人」たちが住む場所です、この小説ではケンイチ君は出ませんが「梁山泊」の師匠たちは出ます、そして様々な意味でナルトの「師匠」に成ります。
ちなみに師匠たちの設定（使う武術や性格など）は原作の物を用いますが、「梁山泊」に住む切っ掛けや出身などはオリジナルに成ります、ご了承ください。

幼少編　第七幕　罪滅ぼし

「ナルトが居ない」この言葉に部屋に居る全員が驚いた。

「居ないってどう言う事ですか！？」

シズネがホムラに詰め寄る。

「わからん・・・ナルトを起こしに部屋に行ったら蛻の殻じゃった。」

「それってまさか！誘拐っ！？」

シズネが最悪の予想を立てるが。

「いやナルトの靴が無かったしまだ布団は暖かった、それに裏口が開けられていた。

おそらく自分で出ていったのだろう、しかし何故・・・」

ホムラは誘拐の可能性は低いと言い、皆は何故ナルトが出て行ったのか考えていると。

「そんなことより一刻も早くナルトを見つけ連れ戻さねば・・・今は朝じゃから人も少ないがもし、里の者たちに見つかればナルトが一人なのをいいことに何をするか解らん。」

コハルがナルトを見つけることが先決だと言う。

「そうじゃな、わしらで手分けして探そう。」

三代目たちが出て行こうとする。

「ええっ！三代目様たちも行くんですか！？」

「当り前じゃ！お前たちも早く探しに行かぬか！！」

「は、はいっ！」

シズネの疑問に対し三代目は当然だと言い逆に叱責されてしまった。

「わしは念のため屋敷内を探す、もしかたらわしらの考えすぎかもしれんしの、お前たちは外を探してきてくれ、子供の体力ではそう遠くには行けぬはずじゃ。」

「ならば猿飛もここに残れ、ナルトが戻ってくるかもしれんし、お前は「火影」だ無闇やたらに外に出るべきでは無い。」

コハルが指示を出し、ホムラは三代目に残るように言うが。

「何を言っとる！わしは「火影」じゃ、この里を誰よりもよく知っている、それに何かあっても大抵のことならば何とかなる！！」

そう言って三代目はいの一番に飛び出して行ってしまった。

「おいっ待て！えぇい！！仕方がない、綱手お前たちは猿飛を追ってくれ、わしは別の所を探す、自来也お前も頼む。」

「ちっ！しょうがないねぇ、いくよっシズネ！」

「はいっわかりましたっ！」

綱手とシズネは三代目を追い、ホムラは二人とは別方向に向かった。

「・・・・・・・」

しかし自来也は他の者たちのように探しに行く素振りを見せなかった。

不意に自分の後ろにある「木ノ葉隠れ」の象徴とも言える「顔岩」を見る、すると「顔岩」の方から「風」が吹いてきた、その「風」は先ほどのように「太陽」の匂いがした。

「・・・・」

自来也の足は「顔岩」の上に登る階段へ向いていた。

自来也は階段を登りながら、何故依頼を引き受けたのかを考えていた。

先ほど綱手に聞かれ答えた通り、ナルトと「ミナト」を重ね合わせているわけでは無い、ましてや「九尾」と同一視など以ての外だ。

これは罪滅ぼしなのかもしれない「九尾襲来の時」自分は別任務で里を離れていた。

もし自分が里に居れば、もし数日早く帰ってきていれば、もしかしたら自分の弟子を救えたかもしれない、それにあの子の事もそうだ、里の者たちを信頼し三代目より聞かされた「ミナト」の想いを、皆理解してくれると信じあの子をこの里に預けたが「九尾」に対する

恨みの深さを失念し、結局はあの子にあんな眼をさせてしまった。

だが、ナルトが目を覚ました時の眼は自分の弟子と同じく「青空」の色をしていた、おそらくあれが本来のあの子の眼の色なのだろう、それを里の大人たちがあの子と「九尾」を同一視するあまり、あの子に危害を加え続け結果あのような眼をするようになってしまったのだ。

だが、せめてあの子にはもう一度あの「青空」のような眼を取り戻してほしい、いや取り戻して見せる、これこそが自分にできる最大の罪滅ぼしだと信じて。

自来也が決意を固めると同時に頂上が見える、そこは木ノ葉を一望できる絶景ポイントであった。

そして、そこには消えた少年が座っていた。

幼少編　第七幕　罪滅ぼし（後書き）

自分で書いてて解りました・・・僕の「次回こそは」は当てになりません！！！でもこの話は以外と早く出来たので今日（正確にか明日の）の夜中に、次の話を上げられると思います、次回はナルトＳｉｄｅの話しになると思います。

幼少編　第八幕　叫び

「旅に出てみたくは無いか？」そう言われたのは、十日くらい前だった。

「たび？」

「そう、旅だ。」

「たびって、なに？」

「旅と言うのはな、この里から出て色々な物を見たり、色々な人たちに会いに行くことじゃよ。」

ナルトの問いに三代目が答える。

「だれと？じいちゃんたちと？」

ナルトは一人で外には出られない、まだ幼いと言う事もあるが何より一人で出歩けば、里人たちにより何かしらの危害を加えられるからだ。

「いや、わし等では無く別の者が一緒に行ってくれるはずじゃ。」

一緒に行くのは三代目たちでは無く、別の人らしい。

「どのくらい？一日？二日？それとも三日くらい？」

ナルトは旅に出る期間を聞く。

「そうだの～ナルトにはたくさんの物や人に会ってきて欲しいからの～・・・かなり長い旅になる筈じゃ。」

するとナルトは暫し目を瞑り考える。

「・・・・・・じいちゃん、ぼく、たびに行きたいな。」

ナルトは答える、精一杯の笑顔を作って・・・

この時ナルトは思った、「あぁ、ぼく、すてられるんだ」と。

（昨日の人たちがぼくを連れて行く人たちなんだ。）

ナルトは木ノ葉を一望できる「顔岩」の上で、昨夜見た人たちの事を考えていた。

（ぼくが出て行けば、じいちゃんたちにも迷惑をかけなくて済むんだから、これで良いんだよね・・・）

ナルトがそんな事を考えていると、突然後ろから声が掛けられた。

「こんな所にたった一人で、どうしんじゃ？」

階段を登り切ると、そこには三代目たちが血眼に成って探している少年がうつむいて座っていた。

自来也は少年に声を掛けた。

「こんな所にたった一人で、どうしたんじゃ？」

すると少年は驚いたように体を浮かせ目を丸くしてこっちを見ている。

「なんじゃ、こんなにも早く見つかったのは予想外じゃったか？」

そう言いながら自来也は少年の隣に座る。

「お主、よくこの場所を知っておるのぅ・・・この場所はあまり知られていない穴場だと言うのに、誰かに教えてもらったのか？」

自来也は自然にそしてなるべく怖がらせないように話すが。

「・・・・・・」

「どうした？」

「じいちゃんたちに知らない人と喋っちゃダメって言われてる。」

もう既に喋っているが、その事には触れずに尚も自来也は話し掛ける。

「そうか・・・では、自己紹介と行こうかのぅ、昨夜会ったが覚えているか？ワシの名は「自来也」じゃ。」

「・・・・え？」

「何じゃ、ワシが先に名乗ってやったんじゃから次はお主の番じゃろう？」

「おじさん、ぼくの事知らないの？」

当然知っているが、ここは知らない定で行く。

「お主がワシの事を知らんように、ワシもお主の事はよく知らん。第一お主に比べたら、ワシの方がよっぽど有名人なんじゃぞ？だから、ほれお主も早よ名乗らんかい！」

「う、うずまきナルト」

ナルトが少し押されぎみに名乗る。

「「ナルト」か・・・良い名前だ。よし、お互い名乗ったんだ、これでもう知らない人では無いの！」

自来也が無茶苦茶な理論を言う。

「さて、さっきの質問だ、ナルトよこの場所は誰かに教えてもらったのか？」

「・・・じいちゃんに、昔連れてきて貰った。」

少年も少々警戒しながらも話してくれた。

「「じいちゃん」と言うのは、三代目の事かのぅ。」

「うん・・・そう。」

すると今度は少年の方から話し掛けてきた。

「ねぇ。」

「うん？なんじゃ？」

「どうして、おじさんは、ぼくを叩かないの？」

「っ！」

自来也もこの質問には面喰ったがすぐに顔を普通に戻し答える。

「「どうして」と言われても、ワシにはお主を叩く理由が無いからのぅ。」

「理由？」

「ナルトは理由も無く叩かれているのか？」

「理由はよく知らないけど、ぼくの中には「狐」が居るんだってみんなが言ってた。」

自来也は一瞬悔しそうな表情になるが、またすぐに顔を戻して話しを聞く。

「お主を叩くのは、里の者全員か？」

「・・・全員じゃないよ、じいちゃんたちはいつも優しいし、アンちゃんとかオヤジさんとか、あと、しろのおじちゃんも叩かなかったよ。」

「アンちゃん？オヤジ？白？？」

じいちゃんたちはおそらく三代目とご意見番の二人だろう、しかし後の三人は一体誰なのか分からないが、この里にもまだナルトの味方は居るようだと自来也は少し安心した。

そして自来也はナルトに今一番聞きたい事を聞く。

「ナルトよ・・・この里は好きか？」

自分でもこんな事を聞くのは馬鹿だと思った、いくら優しくしてくれる人が数人居るからと言っても、この子につらく当たる里人の方が圧倒的に多いのに、好きだと言うわけが無い。

しかし、今ここで聞いて置かなければ、将来この子が大きくなった時いくら里人が回心したとしても、この里が嫌いだから帰りたくないと言うのは明白だ、しかも幼い頃の印象と言うのは特に強く残る、そうなれば里人たちを改心させたであろう三代目たちの努力と時間がすべて水の泡に成ってしまうからだ。

無駄な努力とは言わない、里人の考えを変える事は多いに意味があるだろう、しかしナルトが帰る気の無い里の人間たちの考えを変えるよりも、今はもっと別の事に力を入れるべきだと自来也は想い、ナルトの答え次第ではこの事を三代目に伝えるつもりだ。

そしてナルトの答えを待つ、しかしナルトの答えは自分の予想している物とは違った。

「この里は・・・好きだよ。」

「っ！それは・・・本心か？」

「うん！だってこの里の人たちは、本当はすごくあったかいもんっ。」

自来也はまたも失念していた、この子はあの「二人の子」なのだ。

里の素晴らしさを、里人の暖かさを誰よりも知っているあの「二人の子」なのだ。

ならばこの子が里を嫌いにならず良いところを見つけ好きに成るのも頷ける。

腹は決まった、この子を立派に育て、いつかこの子が里人に受け入れられる時が来た時には必ず、この子を里に帰すと。

「ナルトよ三代目より話は聞いているな、お前と一緒に旅に行く者はワシに決まった。」

その言葉を聞くとナルトはまた俯いてしまうが自来也はそれに気づかずに話しを続ける。

「共に旅をして、またいつかこの里に「やっぱり」・・・何？」

自来也の言葉を遮ってナルトが口を開く。

「やっぱり、ぼくは捨てられるんだ・・・」

「お主、何を言っている？」

「さっき言ったでしょう「この里の人たちは本当はすごくあったかいっ」って、でもぼくが居るとみんな冷たくなる、じいちゃんたちやアンちゃんたちもみんなに冷たくされる、だから、じいちゃんたちはぼくをキライになって、旅に出して追い出そうとしてる、そうなんでしょ？」

「ナルト・・・・もしかしてお主、旅には行きたくなかったのか？」

「だってこのままぼくが里に居れば、じいちゃんたちに迷惑が掛かるから・・・ぼく、じいちゃんたちが大好きだから、だから、ずっと帰ってこれなくても旅に出るって決めたんだ。」

あの時感じた「ナルトは寧ろ旅に出たがっている」と言う言葉の違和感はこれだったのかと、自来也は思った。

考えてみればそうだ、この子は三代目たちを誰よりも信頼しているはず、にも関わらず三代目たちが同伴せず見知らぬ者と行く旅になど行きたいと思うはずが無い。

ならば何故「旅に行きたい」などと言ったのか、この子は大きな勘違いをいしている、三代目たちが自分を旅に出そうとしているのは、自分の事が嫌いに成ったからだと思い込んでいるが、本当はそうじゃ無い、寧ろナルトの事を愛しているからこそ旅に出そうとしている事をこの子は気づいていない。

「じいちゃんたちは、もう、ぼくの事なんかどうでもいいだ、ぼくの事なんか好きじゃ無い「違うっ！！！！！！！」っ！！」

自来也は叫ばずには居られなかった。

「違うぞナルトよ、三代目たちは今でもお前の事を愛している。」

「う、うそだっ！！」

「嘘じゃ無い！！本当に嘘だと思うなら、本人に聞いてみろっ！！！！」

そう言って自来也は体を横に向ける、そこには息を切らせ、汗だくに成り今にも倒れてしまいそうな、三代目火影が立っていた。

幼少編　第八幕　叫び（後書き）

今回は一段と言いたい事と書いてる事が違う気がします、本当ならもっと良いセリフ良い言葉で書きたかったんですが、やっぱり文才無いなぁ。

幼少編　第九幕　理由

「じい・・・ちゃん？・・・」

ナルトは呆然と呟いた。

すると、息を整えた三代目が近づいてくる。

ナルトは今すぐ此処から逃げ出したかったが、体が震えて動け無かった。

「ナルト・・・・・」

目の前に来た三代目が自分の名前を呼ぶ。

「・・・・！」

ナルトは唇を噛みながら目を瞑る。

ナルトは怖いのだ、大好きな三代目の口から罵倒の言葉が出るのが怖い、拒絶の言葉が出るのが怖い、「嫌い」と言われるのが・・・・怖い。

しかし。

”フワッ”

「へ？・・・・」

「すまぬ・・・すまなかったな・・ナルトよ・・・」

ナルトに待っていたのは、罵りの言葉でも拒絶の言葉でも無く、抱きしめられた温もりと涙ながらの謝罪の言葉だった。

「じいちゃん？」

「わしは、お主が「あんな事」を思っていたとは知らなかった・・・お主があんなにも思いつめていたとは、知らなかった・・・・わしの考えが足りなかった、許しておくれナルト・・・」

三代目はナルトの言葉を「叫び」を聞いていた。

おそらく、此処に来るための階段を登っている途中にナルトの叫びを聞いたのだろう、たしかにさっきは「誰かに聞かれる」と言う心配はせずに思いっきり叫んでいた。

ナルトが自来也の方に顔を向けると自来也は大きく頷いた。

そしてナルトは、三代目に一番聞きたく、一番聞きたく無い質問をした。

「ねぇ、じいちゃん・・・・・・・じいちゃんは、ぼくの事、邪魔になったんじゃ無いの？・・・・ぼくの事、キライになったんじゃ・・・無いの？」

「何を馬鹿な事を・・・わしがお主の事を邪魔になど思うはずが無いじゃろう・・・・ましてや嫌いになど・・・・成るわけが無かろう。」

この言葉を聞いたナルトは「この言葉は嘘じゃ無い」と感じた、そして先ほど自来也が言っていた通り自分が勘違いをしている事にも気付いた

そう自覚すると、我慢していた涙があふれ出した。

「ごめん・・・なさい・・っ・・ごめんなさいっ・・・・・・ごめんなさいっ！」

この涙には二つの理由があった、一つは三代目が自分の事を嫌っていないと言う安心から、そしてもう一つは、自分が一番大好きで信頼しているはずの三代目の事を疑い、信じる事が出来なかったからだった。

二人はお互いを抱きしめ合いながら、泣いた。

一頻り泣いて落ち着いた所で、自来也がナルトに聞いてみた。

「ナルト・・・お主が何故里人たちに疎ましがられ、旅にまで出なければ成らないのか、知りたくは無いか？」

「え？」

「っ！自来也！！」

自来也はナルトに何故、自分だけ里人にひどい事をされ剰え旅にまで出なくてはいけないのか、その理由を知りたくは無いか？と聞き、三代目はお驚いたように自来也を見る。

「・・・・・・・・・」

「お主！何を考えているっ！！ナルトはまだ幼い子供じゃぞ！そのような子に「あの話」は辛すぎる！！！」

「たしかにこの子はまだ幼い。　だが、あんたが言ったように何れは真実を知る時が来るだろう。
それならばいっそ、ワシでは無くあんたの口から聞いた方が、この子は現実を受け止められるとワシは思う。
それにあんたは、理由も話さず訳も解らぬままのこの子を旅に出す気か？」

「しかし・・・」

何か考え込んでいるナルトを尻目に、三代目は「あの話」をナルトにするのはまだ早いと言うが、自来也は何れ話すならば自分では無く三代目から聞いた方が良いと言う。

「まぁ聞くかどうかは、この子が決めるんだがのぅ。」

そう言って自来也はナルトの方を見る。

すると先ほどまで考え込んでいたナルトが顔を上げ三代目の顔を見る、そして。

「じいちゃん・・・ぼく、知りたい！」

ナルトの眼には先ほどには無かった強い「意思」が感じられた。

「ナルト・・・・じゃが「この話」はお主にとって、とても辛い話なんじゃぞ？」

「でも、じいちゃんたちは知ってるんでしょ？だったら、ぼくだけ知らないなんて・・・ヤダ」

「たしかに、わしらを始めこの里の者ならば誰でも「あの話」を知っておるが・・・本当に良いのか？もし聞けばお主は立ち直れんかも知れんぞ？」

そう聞き少し不安げになるが、すぐにまた顔を上げ・・・

「でも、やっぱりぼく・・・知りたい。
なんでみんなが、ぼくにだけ冷たくするのか・・・なんでぼくにだけひどい事をするのか。」

「三代目・・・たしかにさっきまでのこの子に「あの話」をすればおそらく、立ち直れなかっただろう。
しかし、あんたが来てあんたの想いを知った、今のこの子ならば、大丈夫だ。」

「・・・・・・・わかった、話そう。」

自来也の後押しもあって三代目が重い口を開く。

語られるのは、忌わしい過去の「惨劇」。

幼少編　第九幕　理由（後書き）

何が書きたいのかよく解らなくなってきた今日このごろ、いつになったら自分でも満足のいく文章が書けるのやら・・・

今回のナルトの発言の中に「ぼくにだけ」と言う言葉が有りましたが、これはナルトから見たら、里の人たちが普段は誰にでも優しそうなのに、どうして自分だけ？と言う意味です、あと今のナルトに「あの話」をするのは正直躊躇いましいたが、今話さねば、三代目たちに不信感を持ったままナルトが旅に出て行ってしまい、お互いかわいそうだと思ったからです。

ついでに言うとナルトが話を聞きたいと思うちゃんとした理由が欲しかったんですが、自分ではうまく言葉にできず、結局は断念してしまいました。

幼少編　第十幕　襲来

三代目は「長い話に成るから」と言い、ナルトたちは岩陰に腰かけ話しを聞く。

「・・・・あの日の夜は、少々騒がしかったが平和に終わるはずじゃった。」

その日、一人の青年が病院の分娩室の前で落ち着き無くわが子が生まれてくるのを、今か今かと心配そうに待っていた。

「「ミナト」少し落ち着かぬか・・・」

現在よりも少し若い三代目が青年を窘める。

「そんな・・・「落ち着け」と言われても落ち着けるわけ無いじゃないですか、医者の方からは「母子共に危ないかもしれない」と言われているのに。」

「ミナト」と呼ばれた青年が反論する。

「そう心配するな、「クシナ」は強い、それはお主が一番わかっておるだろう。
それに生まれてくる子もお主たち二人の子なのだから弱いはずが無い、二人を信じるのじゃ。」

三代目が微笑みながらも力強く言う。

「火影様・・・」

「何を言っとる、わしは既に引退した身、今の火影はお主じゃろう？　「四代目・火影」殿。」

そう言われると、ミナトはくすぐったそうに笑う。

「やめてくださいよ、まだ慣れてないんですから・・・」

「はぁ～、いい加減慣れてくれねば困るんじゃがの。」

三代目は呆れていたが、ミナトの方は多少落ち着いたようで有る。

「ところで・・・生まれてくる子の名前はもう考えておるのか？」

「はい、生まれてくるのは男の子だと解っているので、自来也様の小説の主人公の名前を頂こうかと・・・」

「本気か？あやつがまともな名前をつけているとは思えんが・・・」

三代目は別の意味で子供が心配になる。

「大丈夫ですよ、クシナも良い名前だって言ってくれましたから。」

「まぁお主たち二人が決めた事じゃ、文句は言わんが・・・何と言う名前じゃ？」

「はい！生まれてくる子の名前は・・・・」

ドッオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォン！！！！！！！！！！

「「ッ！！！！」」

ミナトが子供の名前を言おうとしたその瞬間、凄まじい爆音と地響きが起こる。

「なっ何じゃっ！！！」

「僕が屋上に上がって見てきます、三代目はここに居てください。」

「ま、待てミナト！！わしも行く！！！」

そう言った二人は病院の階段を駆け上がり屋上の扉を開ける、そこには・・・

「「ッ！！」」

グオオオオオオオオオオオッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！

そこには、火の手を上げる木ノ葉の町と、此処からでもよく解るほどに巨大な「九本の尾を持った何か」が雄たけびを上げていた。

「何じゃ！あれはっ？！」

三代目が動揺していると、二人の傍らに仮面をつけた忍が突然現れる、彼は木ノ葉が誇る「暗部」正式名称・暗殺戦術特殊部隊に所属する者である。

「報告しますっ！！」

二人は暗部の報告を待つ。

「木ノ葉付近に謎の巨大生物が出現！！現在、木ノ葉を攻撃中！！！近場の忍が応戦していますが一向に進行を止める気配なし！火影様、ご指示を！！！」

報告を聞き、ミナトは先ほどの優しそうな青年の顔ではなく、一人の忍の顔に成り指示を出す。

「まずは人民の避難を最優先に、三代目はご意見番たちと対策を立ててください。」

「はっ！！」

指示を聞き、暗部は此処を離れる。

「お主はどうするんじゃ？ミナト。」

「僕は、前線に出ます。」

この言葉に三代目は驚いた。

「なっ何を言っとるんじゃお主は！お主は「里の長」じゃ！それにこれから父親に成らねばならん！何かあったらどうする気じゃ！」

「ですが、おそらくあいつを止められるのは僕だけです。　それに僕は死にませんよ、だってこれから三人で幸せに暮らすんですから。

」

そう言って、ミナトは飛び出して行ってしまった。

「待て！！ミナト！！！！！」

この時、三代目はミナトの背中に鎌を持った黒いローブの男が憑いている気がした。

幼少編　第十幕　襲来（後書き）

続きます。

幼少編　第十一幕　真実

「それから・・・どうなったの？」

ナルトが三代目に話の続きを聞く。

「調べた結果、木ノ葉を襲った化け物の名は「九尾の妖狐」だと解った。

その後わしはご意見番の二人と対策を練り、他の忍たちに指示を飛ばしておったのだが、暴れておった「九尾」が突然消えての、不審に思ったわしは四代目が戦っていた場所に行ったのじゃが・・・」

三代目は「九尾」が突然消えた事を不審に思い、周囲の制止を振り切り、先ほどまで「九尾」と四代目が戦っていたであろう場所に来ていた、その道中、四代目の弟子である白髪の少年「カカシ」に出会い現在、共に四代目を捜索している。

しばらくの間四代目を探していたところ、仰向けに横たわっている人物を三代目は見つけた。

「ミナト！！」

その人物こそ自分が探していた四代目その人であった。

「大丈夫か？！ミナト！」

「先生っ！！」

四代目に駆け寄る三代目とカカシ。

「何があった！？」

「・・・・・三代・・・目・・「九尾」・は？・・・・・・・・・」

四代目が顔面蒼白に成りながらも「九尾」の事を聞く。

「此処にはもう居らん、一体何があったんじゃ！」

「そう・・・ですか・・・・・・成功・・したんですね・・」

四代目は安心したように息を吐く。

「成功？何の事じゃ。」

「この子を・・・僕とクシナの子です」

そう言って四代目は腕を差し出す、その腕の中には一人の赤子が眠っていた。

「ミナト、この子は・・・・！？」

三代目は赤子を受け取り、この子は一体どうしたのか尋ねようとした時、その子の腹に特殊な紋様が浮かんでいるのを見つけた。

「ミナト・・・お主、まさか！屍鬼封尽を！！」

「「九尾」は・・・・その子の・・・・・・中に・・・・」

四代目は赤子の中に「九尾」を封印したのである。

「馬鹿な事を！この子の中に封じたと言う事は、この子は一生「人柱力」として生きてて行かねば成らぬのだぞ！！お主はそれが解っているのか！？それも自分たちの子に！！」

「大丈夫・・です、その子は・・・僕とクシナの子です、だからきっと・・・強い子です・・それに、この里は・・・「あったかい」ですから・・・そうですよね？・・・・・三代目。」

「くっ！！」

四代目の言葉に三代目は悔しそうに顔を歪める。

「先生！」

カカシが悲痛な面持ちで四代目に話しかける。

「カカシか・・・・カカシ・・一つ・・・・・頼まれてくれるかな？」

「はいっ！先生！！」

「あの子の事で少しね・・・・・・君の出来る範囲で良いんだけど・・・・あの子に何かあったら・・助けてやってほしい・・・・・良いかな？」

「はい！必ず！！」

「ふっ・・・良い返事だ・・・」

「先生！」

四代目はカカシにあの子に何かあったら助けてほしいと頼み、カカシもそれを了承した。

「三代目・・・・」

「何じゃ・・・・・・」

三代目はおそらくこれが彼の最後の言葉だろうと思い、耳を傾ける。

「この子は・・・「英雄」に成れますか？・・・・」

「あぁ、この子は里の「英雄」じゃ、わしが保証する。」

「よかった・・・・・後の事は・・・よろしく・・お願いしますね・・・・・・」

四代目の瞼が下がる。

「待て！ミナト！！・・・まだ、この子の名を聞いておらんぞ。」

すると閉じかけていた瞼が再び開く。

「そう・・・でした・・・ね・・・・・この子の名は・・・「ナルト」です。」

「「ナルト」か・・・良い名前じゃのう・・・」

「だから、言ったでしょう？・・・良い名前だって・・・」

そう言った四代目は微笑みながら・・・逝った。

これは十月十日の出来事だった。

「「ナルト」って、ぼくの名前？・・・それに十月十日ってぼくの誕生日・・・じゃあ「九尾」を封じた赤子って・・・」

ナルトが呆然とつぶやく。

「ああ、そうだ・・・「九尾」を封じられた赤子、それこそがお前だ、「ナルト」！」

自来也がナルトの眼を見て言う。

「それじゃあ・・・ぼくのお父さんって・・・」

「ああ、そうだ・・・かつて「木ノ葉の黄色い閃光」とまで呼ばれた「四代目・火影　波風ミナト」・・・それが、お前の父の名だ・・・」

そう聞くと、ナルトは俯いてしまった。

「どうして？・・・どうしてお父さんはぼくに「九尾」を封印したの？・・・ぼくの事がキライだったの？・・・ぼくなんか生まれ来てほしくなかったの？・・・」

その言葉にいち早く反応したのは自来也だった。

「そうではない・・四代目は・・・ミナトはお前に里の「英雄」に成って欲しかった。
お前なら「九尾」にも負けない強い子に成ってくれるとお前の事を信じていたからだ。」

「でも、だからってお父さんがぼくの事をキライじゃ無いって、どうして言えるの？答えを聞きたくても、もうぼくにはお父さんもお母さんも居ないんだよ・・・」

そう言って、ナルトはしゃがみ込んでしまう。

すると、自来也は懐から一冊の本を取り出しナルトに差し出した。

「こいつを読んでも同じ事が言えるか？」

「・・・？これは、何？」

ナルトが本を受け取って自来也に聞く。

「これはお前の父が生前書いていた「日記」だ。」

幼少編　第十一幕　真実（後書き）

おそらくですが、次回でこのナルト幼少編は終わると思います、まぁ僕の次回は当てにならないんですけどね・・・。

今回の話では、四代目がナルトに九尾を封印したシーンや、その前のナルトを連れてくるシーンなどが抜けていますが、これはいつか番外編などでやれたらいいな～と思っています。

幼少編　第十二幕　日記

手渡されたのは一冊の本。

「お父さんの、日記・・・」

「そうだ・・・この本がお前の疑問に答えてくれる。」

ナルトは恐る恐る本を開く、そこには。

○月×日　晴れ。

今日病院で検査して貰ったところ、クシナのお腹に新しい命が宿っている事がわかった、三か月らしい、僕とクシナの子だ。

生まれてくるのが今から待ち遠しい。

これから僕は一人の父親に成る。

良い機会なので、お腹の子供の成長記録と共に日記を書こうと思う。

○月○日　曇り。

悪阻が酷いようで、今日クシナは一日中寝込んでいた。

辛くないか？と聞くと「少し、でもこの辛さは嬉しい辛さだから」といって彼女は微笑んでいた、こんな時、男の自分が何もしてやれないのが悔しい。

○月◇日　晴れ～雨～晴れ。

クシナの悪阻も大分落ち着き、彼女の希望で久しぶりに三人で散歩に出た。

途中雨に降られたが、すぐに止み空には虹が架かっていた、虹は不吉の前兆だと言われているが、僕はそう思わないと言ったら彼女も同意してくれた。

お腹の子も同意してくれるだろうか。

◎月□日　雨。

最近、クシナの顔が変わってきたような気がする。

昔はかなりお転婆だったが、今は慈愛に満ちた顔に成っている、これが母親に成ると言うことなのだろうか。

それに比べて僕はちゃんとした父親に成れるのだろうか・・・そう

言うとクシナは「大丈夫よ」と昔のような笑顔で言ってくれた。
すこし安心した。

×月〇日　曇り。
今日はクシナと赤ちゃんの定期検診だ。
既に赤ちゃんの姿がはっきりと見えるらしく、検査で性別がわかった。
その写真を見せてもらった。
「アレ」が着いていたので男の子のようだ。
男の子ならば休みの日には一緒に外に遊びに行けるし、忍に成りたいと言ったら修行を見てあげるのも良い。
また一つ楽しみが増えた、早く顔を見てみたいな。

Δ月〇日　晴れ～曇り。
クシナのお腹もかなり大きくなってきた。
部屋でくつろいでいるとクシナが驚いていた「どうしたのか」と聞

くと、彼女は「動いた・・・」とつぶやいた、どうやら初めてお腹の子が動いたので驚いてしまったらしい。

僕も嬉しく成り、彼女のお腹に耳を当ててみたが、その後は動かなかった。

・・・淋しい・・・

Δ月◎日　晴れ。

「今日こそは」と思い、しばらくの間、彼女のお腹に耳を当てていた、するとようやく子供が動いたのが解った。

ここに来てようやく自分にも父親としての実感が出てきた、と同時に今まで以上にお腹の子が愛おしく成った。

二人のためにも今まで以上に仕事を頑張る決意をした。

□月Δ日　晴れ。

今日もクシナと赤ちゃんの定期検診だった。

今日一日は僕も休みだったので一緒に病院について行った。

先生から今のところは、母子共に問題無いとの事、とにかく二人とも無事なようで一安心だ。

◇月×日　　晴れ。

今日は僕の師匠であり「伝説の三忍」でもある自来也先生が家を訪ねてきた。

どうやらクシナとお腹の赤ちゃんの様子を見に来たらしい。

そして自来也先生が書いた小説を読ませて頂いた。

先生はくだらない物語だと言っていたが僕はそうは思わない、あの小説の主人公はどんな絶望的な状況でも決して諦めない所が格好良かったと僕は思う。

だから、生まれてくる子供にもそんな忍に成って欲しいと言う願いを込めて小説の主人公の名前をつける許可を先生に頂いた。

先生は少し渋っていたが、クシナが良い名前だと言うと先生は照れ臭そうに笑っていた。

◇月◎日　雨。

今日の検診で先生から出産時に危険があるかもしれないと言われた。

目の前が真っ暗に成った気がした、家に帰っても僕は一人塞ぎ込んでいたらクシナが近づいてきて僕の手をおもむろに自分のお腹に当てた。

すると洋服の上からでも解るくらいに赤ちゃんが動いていた。

クシナは僕に「きっと、あなたを励ましているのね」と言っていた。

そうだ、僕はこの子の父親なんだ、僕は決意を新たにした。

たとえどんな結果になろうとも、たとえこの子がどんな子であろうとも、僕はすべてを受け入れ、生まれてくる子を愛し続けると言う決意を。

だって生まれてくる子は僕達にとって世界で一番の宝者なのだから。

そして、最後のページには親から子へのメッセージが書かれていた。

「これを読んでいるって事は僕はもうこの世には居ないのかな？
だってこの日記は誰にも読ませる気は無かったからね。
ところで今これを読んでいるのは僕の子供かな？だったら一つだけ言っておくよ・・・・もしかしたら、君に伝えていないかもしれないからね。

無事に生まれてきてくれて、ありがとう、君は僕達の一番大切な宝者だよ「ナルト」。」

ポタッ　ポタッ！

地面に水滴が落ちる、その涙の持ち主は日記を抱きかかえながら泣いていた。

しかしその涙は悲しみから来る物では無く、嬉しさから来る物だった。

その証拠に涙を流している少年の顔は、まぶしい程の「笑顔」だった。

幼少編　第十二幕　日記（後書き）

やっぱり終わらなかったなぁ～。

今回の表現で「宝者」と言う表現を使いましたが、これは誤字ではなく意図的にした物です、この「者」は無機物では無く人の事を指しているのでこの方いいかなぁ～と思ったのでこっちにしました。

漢字の間違いが許せないと言う方々にはごめんなさいです。

幼少編　第十三幕　光

日記に書かれていたのは、父親に成る事への喜び、苦悩、決意、そして溢れんばかりの子供への愛情が記されていた。

「・・・・・」

”ギュッ”

少年の涙は既に止まっており、少年は父親の日記を大事そうに抱える。

「その日記は、いつの日かお前に渡そうと思いワシが預かっていた物だ。
たしかに返したぞ、ナルト。」

「うん・・・ありがと。」

自来也は、一つ自分の任を終え一安心し、ナルトもそれに対し礼を言う。

「ナルトよ、お主がその日記に書かれている事すべてを理解するには、まだ時間が掛かるじゃろう・・・じゃがいつの日か理解できる日がきっと来るはずじゃ、その日まで大切に持って置きなさい。」

「うん、わかった。」

三代目も日記を大切にするよう助言し、ナルトも了承した。

だがナルトの心にの中では「その日まで」では無く、一生この日記を大切にする事を誓っていた。

「さて・・・そろそろ戻るかのぉ。」

そう言って自来也は立ち上がった、それに続いて三代目も立ち上がる。

「そうじゃな、大分長い時間話しこんでしまったからのう。さあ、行こうか？ナルト。」

三代目はナルトに手を差し出すが。

「うん・・・・」

ナルトは中々立ち上がらない。

「どうした？ナルト。」

三代目がナルトに聞く。

「だって、ぼく、みんなに心配掛けたから怒られる・・・」

そう言ったナルトは”シュン”と成る。

「たしかに皆、心配しておったからな多少は怒られるかもしれんが、それ以上に安堵すると思うぞ？なにせ未だに里を探し回っている・・・」

「「あっ」」

「？？」

途中まで言いかけた自来也とそれを聞いていた三代目が二人揃って固まり、ナルトが不思議そうに二人を見る。

所変わって、火影の仕事部屋。

「たくっ！見つかってたんなら連絡くらいしなよっ！お陰で里を何周も周っちまったじゃないかっ！！」

「まあまあ、良いじゃないですか綱手様・・・何事も無く見つかったんですから。」

そう、自来也はナルトを見つけた際、三代目には連絡したが他の者には連絡していなかった。

そのためコハルとホムラはそのまま、綱手とシズネに至っては突然消えてしまった三代目も探していたため、今の今まで里を駆けずり回っていたのだ。

「イヤ～すまんかのぅ、すっかりお前たちの事を忘れていて・・・ハハハハ。」

「・・・ごめんなさい。」

自来也はまったく悪びれず笑いながら、ナルトは自分のせいなのを自覚しているために本当に申し訳なさそうに謝る。

「自来也は後で絞めるとして「っ！？」・・・あんたの事はもう怒って無いから安心しな、シズネが言ったように何事も無かったようだし、ちゃんと謝ったんだからもう良いよ。」

そう言って綱手は笑いながらナルトの頭を撫でる。

「っん・・・・」

ナルトもくすぐったそうにしながらも甘んじて受けていた。

今、この空間にはとても平和な時間が流れていた。

約一名はこの世の終わりのような顔をしていたが・・・・・・・・・

「ねぇ、じいちゃん。」

「何じゃ？ナルト。」

ナルトが三代目に質問する。

「まだじいちゃんから聞いてないよ？どうしてぼくが旅に出なくちゃいけないのか。」

「「「「！！」」」」

三代目と自来也以外の者が驚く。

「そうじゃったな、まだ話してなかったか。」

「猿飛！お前・・・まさか、話したのか・・・・」

ホムラが三代目に聞く。

すると他の者たちも三代目を見る。

「ああ、この子にすべてを話した。」

「何故だ！？この子に話すのはまだ早いと言っておったのは、お前ではないか。」

コハルも三代目に聞く。

「・・・たしかにこの子にとってあの話は辛い物じゃった、じゃがこの子自身が聞く事を望んだ・・・それにこの子はすべてを知っても自身を受け入れる事が出来た。
この子はわしらが思っている以上に強い子じゃったよ。」

この言葉を聞くと二人は押し黙った、既に話してしまった事を言っても後の祭りなわけで、それにナルトが受け入れているのならば、自分たちが言う事は何も無いからである。

「この子が事情を知ってるんなら話は早いね、教えてやったらどうだい？あんた方が何を思ってこの子を旅に出そうとしていたのか。」

綱手が三代目たちに話すよう促す。

「・・・そうじゃな。」

その後三代目たちはナルトにすべてを話した。

ナルトを「家族」として他の里人たちにも受け入れて欲しい事。

そのためには、時間と切っ掛けが必要な事。

そして、ナルトに世界の広さと美しさを知って欲しい事。

ゆっくりと時間をかけて、ナルトに説明した。

「・・・・これでわしが考えていた事はすべてじゃ。」

そう言って三代目は自分のイスに再び深く腰掛けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

そして話を聞き終わったナルトも何かを考えているようである。

「・・・・ナルトよ、もし旅に出るのが嫌ならばこの話、無かった事にしても良いのだぞ?」

「え?」

これには、ナルトのみならず他の面々も驚いた。

「わしが間違えておったのかもしれん、いくら里の者たちの考えを変えるためとはいえ、お主を里の外に出すなど、結局はお主を追い出すと言う事には変わりない。
時間は掛かるかもしれんが、この里に残っ「じいちゃん。」・・・何じゃ？」

ナルトが三代目の言葉を遮る。

「ぼく、旅に出たい。」

「・・・本当にいいのか？」

三代目は不安になる、この子がまた自分たちに気を使って言っているのでは無いかと。

「うん！じいちゃんたちに暫く会えないのは淋しいけど、今はこの前みたく嫌な気持ちじゃ無くて本当に見てみたいんだ、世界を。
それにお父さんたちも昔は里の外に出てたんでしょ？だったらやっぱり見てみたいし、行ってみたい、お父さんたちがどんな所に行ってどんな物を見てきたのか。
そして、またこの里に帰ってきて、この里で暮らしたい。
だから、じいちゃんたちにお願いしても良い？里の人たちの事。」

ナルトが三代目に聞く。

「ああ解った、約束しよう。
必ずお主が帰って来るまでに里の者たちの考えを変えて見せる。」

「うんっ！」

三代目もナルトと約束をする。

ナルトの眼は未だに「深い海」のような色をしている、だがその眼には、まだ小さいが光が戻ってきた気がした。

幼少編　第十三幕　光（後書き）

次回はいつもより多少短く成るかもしれません。

まあ、いつもそんなに長くは無い？のか？

感想を二件ほど頂きましたが、嬉しい気持ちと恐縮する気持ちでいっぱいです、とにかくありがとうございました。

幼少編　第十四幕　旅立ち

この日、ナルトは新たに旅に出る決意をし、三代目はナルトが帰ってくるまでに里人の考えを帰ると言う約束を交わした。

「そうと決まれば、早めに準備したほうが良いんじゃ無いのかい？」

綱手が三代目達に聞く。

「いや、その心配は無い。
もう既に旅の支度は済んである。」

そう言ったホムラは、何処からかパンパンに中身が詰まった大きめのリュックを取り出した。

「随分準備がいいね。」

「ナルトに旅の話をした日に、猿飛の方から「ナルトは旅に出たがっている」と聞かされていたのでな、後々になって慌てるよりは良いと思い、先にわしらの方で必要だと思う物を準備しておいた。ナルト、後で確認しておきなさい、それと他に必要な物があれば遠慮なく言いなさい、すぐに用意させる。」

綱手の疑問にコハルが答える。

「ところで出発はいつ何ですか？」

今度はシズネが質問する。

「・・・なるべく早い方が良いかもしれん。
最近、里人達のナルトに対する動きが活発に成ってきてのう・・・
恥ずかしい話だが、わしらでも里人を抑える事が難しくなってきて
しまった。」

「・・・そうですか・・・」

三代目の返答にシズネが肩を落とす。

「自来也、お主はどうだ、いつなら出られる。」

三代目が自来也に聞く。

「本来ワシは、此処に来る予定は無かったので、出ようと思えば今
すぐにでも出られるが・・・この際、いつ出るかはナルトに決めて
もらえば良いのでは？」

そう言って自来也はナルトを見る。

「・・・・そうじゃな、ナルトよお主はどうしたい？」

三代目もナルトの方を見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・明日。」

ナルトがポツリと呟く。

「ぼく・・・明日、行くよ。」

ナルトは三代目の眼を見て言う。

「そんなに急ぐ必要は無いぞ？もう少しじっくり考えても。」

「ううん・・・ぼく、もう決めた、明日、旅に出る！」

三代目もナルトの眼を見る。

「・・・・・・・わかった、お主が決めたのなら何も言うまい、それにお主は一度言い出したら聞かんからのう。」

「ありがとう、じいちゃん。」

三代目は呆れながらも少しだけ嬉しそうだった。

「ホムラ、コハル、少し頼みが有るんじゃが、いいかの？」

「何じゃ、改まって。」

三代目が二人に相談する。

「今日一日、火影の仕事を休ませてもらいたいんじゃが。」

「？どうしてまた。」

コハルが不思議そうに聞く。

「何、これから暫くナルトに会えんからの、今日一日は一緒に居たいんじゃよ。

良いかの？ナルト。」

「じいちゃん・・・うん！」

そう言って三代目はナルトに微笑む。

「・・・・いいだろう、その代わり、わしらも混ぜて貰うが良いかの？」

ホムラが三代目に尋ねる。

「それはわしが決める事では無い、ナルトに聞いてみねば解らんのう。

どうじゃ？ナルト。」

三代目はナルトを見ながら言う。

「うん良いよ、ホムラのじっちゃんもコハルのばっちゃんも一緒が良い！」

ナルトは二人に笑いながら言う。

「そうかそうか、わしらも一緒か。」

コハルがナルトの頭を撫でながら言う。

その顔はいつもの部下達に見せる厳しい顔では無く、一人の孫を見る祖母の様であった。

「なんだ、あたし達は仲間外れかい？なぁ自来也？」

「寂しいのぉ、これから一緒に旅をすると言うのに・・・のぅ、シ

ズネ。」

「へっ!?・・・そ、そうですね～（汗）」

自来也と綱手は二人して大げさに肩を落とし、シズネもどもりながらも同意する。

するとナルトが二人の傍にやってきて。

「ううん、みんな一緒が良い。
良いでしょ？じいちゃん。」

と三代目達に聞く。

「はぁ～～、まぁ良いじゃろ。」

これには三代目も渋々了承した。

その後、三代目達は一日中ナルトと一緒に過ごし、たくさんの話をした。

まずは、綱手とシズネの自己紹介に始まり、主な話はナルトの両親について、子供のころの失敗や二人の馴れ初め等・・・

そして、あの二人が忍として、人としてとても素晴らしい者だったと言う事。

各々が持つ両親の話はナルトにとって、とても有意義な時間だった。
二人のエピソードは尽きる事が無く、夜遅くまで話し込んでしまい明日は早いからと言う事で、ナルトは眠りに就いた、その寝顔は三代目達が今まで見た中で一番安らかで楽しそうな寝顔だった。

その日の深夜。

「ホムラ、コハル、頼みが有るんじゃが・・・」

「何じゃ？改まって。」

「・・・このやり取り、昼間にもやったな。」

三代目がご意見番の二人に相談する。

「わしに、罰を与えてはくれんかの？」

「・・・どう言う事だ？」

コハルが「意味が分からない」と言う顔で聞く。

「今回、わしは自身で定めた「九尾の事を他言してはならん」と言う法を自身で犯してしまった、じゃがわし自身の罪をわし自身で裁く事はできん、じゃから二人に頼みたい、わしに罰を与えてくれんか？」

「「・・・・・・・・・・」」

三代目は自身の罰を二人に決めて貰いたいと言い、二人はお互いに顔を見合わせ考える。

「良いだろう、猿飛、お前に罰を与える。」

ホムラがそう言うと三代目はどの様な罰も受ける気で聞く。

「お前への罰は・・・「ナルトが帰ってくるまでに里人の考えを改めさせ、ナルトを家族として迎え入れさせる事」・・・でどうじゃ？」

「！？」

三代目が驚き、ホムラがイタズラに成功したような顔をする。

「そうじゃな、それがお前に一番合っている罰じゃな。」

コハルも同じような顔をする。

「ああ、それにこの罰は骨が折れるぞ？」

ホムラが三代目に笑いかける。

「・・・・フッ、そうじゃな、これは骨が折れる罰じゃな。」

そう言った三代目の眼には光る物が有った。

次の日の早朝、まだ日も昇りきってはいない時間。
あまり遅い時間では里人が騒ぐからと言い、この時間に出発に成った。
子供には相当早い時間だが、ナルトの眼はしっかりと覚めていた。
「ナルト、忘れ物は無いか？」
見送りに来た三代目が聞く。
「うん、無いよ。」
ナルトもそれに答える。
「何かあったら、手紙を寄越すんじゃぞ？すぐに飛んで行くからの。」
同じく見送りに来たホムラが言う。
「うん、ありがとじっちゃん、でも大丈夫だよ。だってぼくは「四代目・火影」の息子だもん。」
ナルトが少しだけ胸を張る。
「体に気をつけてな。」
コハルもナルトに言う。

「うん、ばっちゃんも気をついけてね。」

ナルトもコハルに言う。

「では、行こうかのぅ。」

自来也が歩きだし、その後に綱手とお辞儀をしたシズネがついていく。

「元気でな、ナルト。」

三代目がナルトの頭を撫でる。

「うん・・・・・じゃあ、いってきます!!」

ナルトも三人の後を追い走っていく。

三人はナルト達が見えなくなるまで里の入り口に立っていた。

「寂しくなるな・・・」

ホムラがそっと呟く。

「寂しがっている暇は無いぞ?やらねばならん事が山積みなんじゃからな。」

コハルがホムラを窘める。

「そうじゃな、わしらにはわしらにしか出来ん事をやるとしよう。

では、行こうかの。」

そう言って三代目達も自分達の仕事場に戻って行った、あの子が帰ってきた時に少しでもあの子が住みやすい里にするために。

木ノ葉を出て少しした所で不意にナルトが立ち止り、一本の木を見上げ何事か呟いた。

「　　」

その言葉は小さすぎてよく聞こえなかったが、ナルトは満足したように微笑みまた歩みを再開した。

ナルト達が見えなくなった頃、先ほどナルトが見上げていた木には二人の男女が木の枝に座っていた。

「良かったのか？さよならも言わずに・・・」

二人の内、大柄な男がもう一人に聞く。

「良いのよ、それにあの子が言ったでしょう？「いってきます」って。

言いたい事は次に合った時に言うわよ。」

もう一人、髪を束ねた女性が言う。

「まあ、お前が良いなら良いんだけどな「アンコ」
じゃあ俺は先に帰ってるからな。」

「ハイハイ・・・・・・・・・・・・・・いってらっしゃい、ナルト。
」

よく晴れたこの日、一人の少年が木ノ葉から旅だった。

あの「惨劇」から六年目の春だった。

これから彼の歩む道は決して緩やかでは無いだろう、しかし彼が諦
める事も無いだろう。

なぜなら、彼には目標が出来たから。

父の様な強く優しい人に成る事、母の様に強い心を持つ人に成る事。

それが彼に出来た、新たな目標であり夢だから。

木ノ葉から吹く「風」は彼の背中を押しているようだった。

これは、いずれ「太陽」と呼ばれる者の始まりの物語。

幼少編　完。

幼少編　第十四幕　旅立ち（後書き）

短くは・・・無いな・・・って言うか今までで一番長いかも。

はい、今回で幼少編は完結です、次の下忍編はナルトが木ノ葉に戻るところから始まります。

ナルトの修行が見たい、梁山泊の人達が見たい、と言う方には申し訳ありませんが、修行シーンは何れ本編でやる予定です、ですがあんまり期待しないでください。

じゅ、十四？・・・・あっれ～？この幼少編は自分の中では長くても、五話六話くらいで終わる予定だったんだけどな～、あれも書きたい、これも書きたいって書いてたら、こんなに長く・・・自分には文才だけでなく、話をうまくまとめる才能の無かったみたいです・・・・

ここで今一度、話の構成や資料集め等に徹したいと思います、そのため次回、下忍編は少なくとも一週間から二週間後と言う事になると思います、楽しみにして頂いていた方には申し訳ありませんが、より良い作品にするため今暫しおまち頂ければなと思います。

最後に此処までお付き合いくださった方々にお礼を申し上げさせていただきます。

まだまだ未熟者ですが、これからもこの小説をよろしくお願い出来ればと思います。

では、またお会いしましょう。

少年編　第一幕　帰還

木ノ葉隠れの里の外れにある小高い丘、里の象徴とも言える「顔岩」を見る事が出来るこの丘に、二人の人影が有った。

「不安か？」

二人の内の一人、白髪の男性がもう一人に聞く。

「少し・・・」

返ってきたのは、まだ声変わりを迎えていない少年の正直な答え。

「そう心配するな、三代目の手紙によれば「最近は里の者達も心の整理が大分つき、お前の事を受け入れてくれるだろう」との事だ。それにお前を「梁山泊」や綱手に預けている間、監視の報告も兼ねてワシも里に何度か足を運んだが、里の者達も少しずつ変わっていた様に思う。」

白髪の男性が少年を安心させるように言う。

「しかもお前はこの六年間、ワシと共に旅をした事で多くの者に出会い、話し、学び、知った筈だ「人は変われる」と言う事を。第一、お前はワシの弟子だ！これ以上安心な事も中々無いぞ？」

そう言って、男性は少年の「太陽」の光をそのまま吸い込んだ様な黄金の髪をワシャワシャと撫でた。

「んっ・・・」

少年はくすぐったそうにしながらも、大人しく撫でられながら先ほど自分の師が言った事を考えていた。

そうだ、自分はこの六年の中で身をもって知った「人は変われる」。

それに自分は強くなった、体も鍛えたし、まだまだ「師達」には届かないが技も磨いた、何より「心」が強くなった、だから、きっと大丈夫。

まだ変わっていない人が居ても今度は自分の行動と言葉で変えて見せる、そう言えるくらい強くなった、しかも・・・

「うん、オレは「伝説の三忍・自来也」の弟子だ！大丈夫に決まってる！」

少年は白髪の男性「自来也」に向けて笑顔で言う。

「ふっ、言うように成りおって、だがその意気だ！お前の「ド根性」をしっかりと里の者達に見せれば、必ず上手くいく！」

自来也も黄金の髪の少年「ナルト」に笑顔で返す。

「よし！そろそろ行くかのぉ！」

「はいっ！」

二人は木ノ葉に向かって歩みを進める。

物語は少年が故郷に帰還した事で大きく動き始める。

少年編　第一幕　帰還（後書き）

お久しぶり（？）です、まだ一週間たっていませんが、とりあえず少年編・第一幕、更新しました。

短いですが、プロローグ的な物なのでこのぐらいでちょうど良いかと。

ナルトの口調が違いますが、第零幕でも注意として書いていますので、あしからず。

後、幼少編は一日一話、或いは二話の更新でしたが、この少年編からはかなり不定期になると思います、楽しみにしてくださってる方には申し訳ありませんが、やはり長い目で見ていただけると幸いです。

ともかく、第二部もがんばります。

少年編　第二幕　「ただいま」

昼下がりの木ノ葉隠れ、門を少し入った所にある詰所にて、二人の名も無き（本当はあるのだろうが面倒なので省略）中忍が暇を持て余していた。

「暇だな・・・」

一人が空を見上げながら呟く。

「そうだな～」

もう一人も同じように呟く。

自分達の仕事は、怪しい人物、主に敵国のスパイ等が里の中に侵入しないかを見張る大事な仕事だが、そもそもスパイならば堂々と正面からは入らないし、この時間帯は人の出入りが午前に比べて極端に少なくなる時間だ、なので必然的に自分達のやる事が無くなり暇になる。

「「はぁ～」」

二人がまったりしていると。

「お主達！！仕事をサボるなよ～！」

「「はっはい！！」」

突然掛けられた言葉に二人は反射的に立ち上がり返事をしてしまう。

「「？？・・・！！」」

二人が声を掛けられた方を見ると、そこには自分達が尊敬している人物ともう一人少年が歩いていた。

二人が改めて声を掛けようか迷っている間に、二人は既に居なくなっていた。

「おい・・・今のって・・・」

「自来也様、だよな？・・・」

「「じゃあ、一緒に居た子供は・・・」」

火影の仕事部屋に三人の老人が集まっていた。

「・・・・・・・・」

三人の内の一人、木ノ葉のご意見番、「水戸門ホムラ」が忙しなく部屋の中をうろうろしていた。

「ホムラ、少しは落ち着け・・・」

もう一人のご意見番「うたたねコハル」がホムラを窘める。

「そう言うコハルも、随分手が忙しく動いているでは無いか。

まったく、木ノ葉のご意見番がこれでは、帰ってきたナルトに示しがつかんわ。」

木ノ葉の里長「三代目・火影」が呆れながら二人に言う、しかし。

「「お前に言われたくは無い。」」

三代目の仕事机は三代目自身の貧乏ゆすりでガタガタと揺れていた。

今日は、ナルトが約六年ぶりに木ノ葉に帰ってくる予定の日だった。

そのため、嘗ての親代わりであった三人は、こうも落ち着きが無いのである。

しかし、三代目達は一抹の不安を抱えていた。

たしかに里人達は変わった、それは間違いない、だがそれはナルトが居ない状態での話だ、もしナルトが帰ってきた時、里人達がまた憎しみを取り戻さないと言う保証は無い、それ故、またナルトに悲しい思いをさせやしないかが心配なのである。

”コンコン”

三人がそんな事を考えていると、不意に扉をノックする音が聞こえた。

「入れ。」

三代目がそう言うと、扉が開き受付のくノ一が入ってきた。

「失礼します・・・三代目様、受付の方に三代目様、並びにご意見番のお二方にお会いしたいと仰る方々が来ております。」

くノ一が要件を伝える。

「ほう、それは誰かわかるかの？」

三代目が一応用心のために聞く。

「はい、一人は自身の名を自来也と名乗っておられましたので、おそらく、かの伝説の三忍の一人、自来也様かと、もう一人は自分の弟子だと仰っていました。」

「わかった、通してくれて構わぬ。」

「はい、承知致しました。」

そう言ってくノ一は、扉を閉めた。

「ふぅ、いよいよか・・・」

ホムラがため息を吐きながら言う。

「何じゃ、柄にもなく緊張しているのか？」

コハルがからかう様に言う。

「まあ、そう言うで無い、事実わしもかなり緊張しておるしのぉ。」

三代目がそう言った数分後。

”コンコン”

再び扉がノックされた。

「入りなさい。」

その言葉を合図に扉がまた開く、そこには三代目の弟子である自来也が立っていた。

「おぉ、お三方ともお揃いで。」

自来也が三人を見て言う。

「そんな事は良いから、早く入れ。」

コハルが自来也をせかす。

「はいはい、よしお前も入れ、ナルト。」

「はい。」

自来也が部屋に入りその後ろから、ナルトが部屋に入る。

そこには、嘗ての自分達の子供であり、孫でもあった少年が大きく成長した姿で立っていた。

「久しぶり、じいちゃん。

それと・・・ただいま。」

少年の眼は綺麗な「青空」の色をしていた。

少年編　第二幕　「ただいま」（後書き）

第一幕よりは長いけど、やっぱり短いかな・・・今後はこの後書きもあまり書かなくなるかもしれません。

まぁ、どうせ誰も読んで無いんでしょうけどね・・・

少年編　第三幕　成長

三人はしばし呆然としていた。

何故なら、今自分達の目の前に立っている少年の眼は自分達の記憶に有る「深い海」の色では無く「青空」の色をしていたからだ。

それに成長した姿は、まだ幼さが目立つが節々に彼の両親の面影を見る事が出来る。

「どうしたの？・・・じいちゃん。」

ナルトは三人の事が少し心配になり、再び話し掛ける。

「あぁ、すまんすまん、少々考え事をな・・・それより久しぶりじゃのぉナルト、よく帰ってきてくれた。」

三代目がナルトに話し掛けられ我に返り、久しぶりの対面と無事に帰ってきてくれた事を喜んだ。

「うん、だってこの里はオレの「故郷」だもん。」

そう言ったナルトの笑顔に、嘗ての四代目を此処に居る四人は見た。

「・・・まあ立ち話も何じゃ、座ってゆっくり旅の話でも聞こうかの。

今、茶をいれてくる、イスに座って待ってなさい、ついでに自来也も。」

「ありがとう、ばっちゃん。」

コハルが茶をいれるために席を立ち、ナルトはイスに座る。

「ワシはついでなのか・・・」

自来也もナルトに習い、しょげながらも座る。

「自来也は兎も角、本当に大きく成ったな、ナルト。」

ホムラがナルトの頭を撫でながら言う。

「そうかな？自分じゃ、よくわかんないけど。」

ナルトは少し照れ臭そうに言う。

「ところでナルト、この六年間の旅はどうじゃった。」

コハルがお茶とお菓子をテーブルに置き、席についてからナルトに聞く。

「うん・・・いろんな所に行ったし、いろんな人にも会えた、楽しい事も悲しい事も有ったけど、やっぱりオレ、旅に出て良かったよ。」

ナルトの言葉と表情に三人は、この六年で本当に色々な事が有ったのだろうと感じた、楽しい事も辛い事も・・・

だが、それでもナルトは旅に出て良かったと言ってくれた、その言葉でナルトは体だけで無く心も大きく成長した事を、三人は実感し

た。

「そうか・・・まぁ、土産話は後でゆっくり聞かせてもらうとするが。
どうじゃ？久しぶりに帰ってきた里は、この里は変わったと思うかの？」

三代目が今一番、気になる事をナルトに聞いた。

「う～ん・・・まだ、よくわかんない。
里に帰ってきたのはついさっきだし、大通りをまっすぐ歩いてきたけど、「エロ仙人」も一緒だったから・・・」

ナルトは考えながら言う。

「「エロ仙人」？」

三代目が首を傾げる。

「コラッ！！ナルト！！「人前ではその名で呼ぶな」とあれ程言っただろぅがぁ！！！」

自来也がナルトに吼える。

「別に良いじゃないですか、知らない人の前でもあるまいし。」

ナルトは自来也の怒声を物ともせずに答える。

「エロ仙人・・・エロ仙人か・・・ッ、ぬはははははははは！！
なるほど「エロ仙人」か！！これは傑作じゃ！」

三代目が意味を理解すると大声で笑う。

「良い呼び名ではないか、これほどお前に合った名も中々あるまい。」

「左様、お前を表すには持ってこいの名じゃな。

ナルトは素晴らしいセンスを持っている。」

コハルとホムラもニヤつきながら言う。

（くっ！この老いぼれ共め・・・！！）

自来也は拳を握りしめながら顔を赤くする。

だが自分にも思い当たる節が有るため強く出れない、ましてやこの三人は自分の事を幼少から知っている数少ない人達なので、尚の事、恥ずかしさと惨めさが大きいのである。

「うぉっほん！・・・そんな事より、お三方に話しておかなければ成らない事が、有るんですがのぅ。」

自来也が一つ咳払いをして場の雰囲気を真剣な物に変え、自身も真剣な顔つきに成る。

「「「「・・・・・・」」」」

三代目達、そしてナルトも自来也の話を聞くため真剣は表情に成る。

「実は、ナルトの「中に居る存在」について、それとナルト自身に

ついて・・・何ですがのぅ。」

「「「ッ！」」」

自来也が話そうとしている事を聞き三代目達はより真剣な顔に成る。

「何か・・・有ったのじゃな。」

三代目が三人を代表して聞く。

「もう一度聞くが、話しても良いんだな？ナルト。」

それに対し自来也はナルトに確認をする。

「うん、何時かは話さなきゃいけない事だし、それにじっちゃん達なら大丈夫だと思うから。」

ナルトは三代目達の目を見ながら言った。

「・・・わかった・・・実は・・・」

自来也は語る、六年の間に起こった事のすべてを。

少年編　第三幕　成長（後書き）

語ると言っていますが、次回では省略し実際にちゃんと語るのは、かなり後に成ります、ナルトの事や「ナルトの中の存在」についてはまだ謎のままにしたいので。

ナルトの自来也に対する呼び方や接し方についてですが、ナルトは自来也を最初は「自分の父の師でもあった忍」として尊敬していましたが、長い間共に旅をしていく中で、取材と称した覗きや女の子がいるお店に行く姿を見て、だんだん自来也に対する態度や普段の呼び名が変わっていきました。

ただ、ナルトも自来也の事を普段の行動は「ちょっと」と思っていますが忍としては尊敬しており、師と仰いでいるので、修行の時や真面目な話の時は、師匠（師匠と書いて先生と読む）と呼びます。

ナルトに関しての簡単な説明（容姿編）

突然ですが、ここでナルトについて簡単に説明しておきます、詳しい事は何れ書く予定のプロフィールにてお伝えしますが、今回は見た目、即ち容姿についてです。

まず始めに、顔ですが早い段階から原作よりも多くの経験をした事でかなり大人っぽく成っています（同年代の子供に比べて）また、髪の毛も近くに自来也が居た事や四代目の写真を見た事で原作よりも長いです。

なので顔と髪は四代目と原作のナルトの中間くらい？（まだ子供なので原作のナルト寄り）を想像して頂ければ、わかりやすいかと。

次に身長ですが、原作の第一部開始時で１４５?後半でも１４７.５?でしたが、この小説のナルトは既に１５０?を超えています、これは第零話でも書きましたが、単純に歳が原作よりも一歳うえである事と、原作のようにラーメンやお汁粉だけで無くきちんと野菜などの栄養の有る物を取っていたからです。

（栄養をちゃんと取らないと身長って伸びないと思うけど、違うのかな・・・）

栄養をしっかりと取る事の大事さと、食べ物を粗末にしてはいけないと言う事をわかっているので、ナルトはちゃんと野菜も食べます。

なので原作が始まる下忍編ではさらに身長が伸びています。

最後に服装ですが、原作ではオレンジを基調とした明るい服でした

が、この小説のナルトは第二部の物に近い、黒が入ったオレンジ系の服（それでもやっぱり少しは派手ですが）を好みます。

ついでにナルトの歳が一歳うえについてですが、原作通り十二歳では修行の期間が五年になり短いと思ったのが一つと、サスケ達がナルトの意見を素直に受け止める一つの大きな理由が欲しかったからです。

簡単でしたが、ナルトの容姿についてはこんな所です。

（これらすべては作者のイメージですのであまりお気になさらず）

少年編　第四幕　報告と方針

自来也が話しだした頃、木ノ葉に一つの噂が流れていた。

「甘栗甘」木ノ葉でも指折りの甘味所である此処に、一人の女性が名物の団子を食べていた。

彼女の額には木ノ葉の額当てをしている事から木ノ葉の忍なのだろうが、驚くべきは彼女の横にある皿だ、皿の上には彼女が食べた団子の串がこんもりと小さな山に成っている、しかも、反対側の皿にはそれを上回る団子があった。

彼女の名は「みたらしアンコ」木ノ葉でも有名なくノ一である。

そんな彼女が好物の団子を食べていると、横の席から話し声が聞こえてくる。

「ねぇ、聞いた？あの自来也様が木ノ葉に帰ってきたって。」

「あぁ、しかも一緒に子供もいたらしいぞ。」

「その子供って、やっぱりあの子だよね、どうしよう・・・」

そんな会話を聞ながら、アンコは噂の少年の事を考えていた。

（へぇ～帰ってきてたんだ、まぁその内会えるでしょう、その時はたっぷり可愛がってあげるわよ・・・ナルト）

アンコはニヤリと笑い、口元についた餡を舐める。

「何と！！それは真か！？」

三代目達が自来也から聞いた事は三人に衝撃を与えた。

「最初はワシも信じられなかったが、何度か話を聞くうちに嘘は無いと判断した。
それに木ノ葉に向かう道中、話に出てきた森を発見し中に入ってみたところ、「彼女」の言う通り「彼女」の仲間達であろう亡骸を見つけた。
其の儘にして置くのも何だったので、ワシとナルトで出来る限りの埋葬をしたがのぅ。」

自来也はこの話に嘘は無いとし、裏付けまで取ってきた。

「そうか・・・しかし、もしその話が本当ならば、わしらは酷い誤解をしておったのかもしれんのぉ。」

三代目が酷く落ち込んだように言う。

「猿飛、この話を信じるのか？
ナルト達が「奴」に騙されている可能性も捨てきれんぞ？」

ホムラが三代目に忠告する。

「たしかに、ワシ一人が信じている程度ではそう言われても仕方がない、だがこの話はワシを始め、綱手やシズネそれに「梁山泊」の

御仁達にも聞かせ全員が嘘偽り無しと判断した。
これでもまだ、信用できませんかのぅ？」

「「・・・・・・」」

自来也の言葉にさすがのご意見番二人も黙ってしまう。

「それにあいつ言ってた、じいちゃん達が間違えているのは自分の「呼び名」だけで自分が木ノ葉を襲った事に変わりは無いって、償いきれない罪を犯した事に変わりは無いって。
たぶんずっと前から悔やんでたんだと思う、実は木ノ葉を出る少し前から、夢にあいつが出てきてオレに謝ってたんだ「すまない・・・すまなかった」って、泣きながら謝ってたんだ。
オレは、あいつの話を信じる。
だから、じいちゃん達にも信じて欲しいんだ、あいつの話を。」

ナルトもこの話を肯定し三代目達に信じてくれるよう話す。

「・・・・・わしは信じてみようと思う。」

「猿飛！！」

ホムラが三代目を見る。

「じゃが、それではこの二人が納得せんじゃろう。
だから、ナルトよ、わしら三人にも話しをさせてくれんかのぉ、その「彼女」と、そして実際に話してみてから信じるかどうかを決めようと思うが、どうじゃ？二人とも。」

三代目がナルトとご意見番の二人に提案する。

「うん、多分あいつも話したいと思う「謝りたい」って言ってたから。」

まずナルトが了承する。

「まぁ。話ぐらいなら良いだろう、それに実際、話して見ないとわからん事も多い。」

「それにナルトの封印はしっかりしているようだし、心配は少ないじゃろ。」

ご意見番の二人も納得したようだ。

「ありがとう、じっちゃん、ばっちゃん。」

ナルトが二人に礼を言い微笑む。

「まったく、とんだ土産話だったな。」

ホムラがイスにもたれながら言う。

「本当じゃ、寿命が縮んだわい。」

コハルも脱力したように言う。

「まあまあ、二人とも・・・それよりナルト、お主はこれからどうすんじゃ？」

三代目が二人をなだめ、ナルトに問いかける。

「どうするって？」

ナルトが不思議そうに聞き返す。

「知っているとは思うが、自来也には大蛇丸と言うやつの監視を命じておってのぉ、これからも監視は続けて貰うつもり何じゃが、お主はどうする？また自来也について行くのか？それとも木ノ葉に残るか？」

三代目が再びナルトに問う。

「そんな事、最初から決まってるよ、じいちゃん。
オレの故郷はこの里だ、だからオレはこの里に帰ってきた、そしてオレはこの里で「忍」に成る！」

「・・・そうか。」

「フッ・・・」

ナルトははっきりと答え、三代目も心なしか嬉しそうにし、自来也は予想通りの弟子の答えに笑みを浮かべる。

「しかし「忍」に成るならば「アカデミー」を卒業せねばの。」

「へ？・・・・・」

コハルの言葉にナルトが固まる。

「何じゃ、知らなかったのか？木ノ葉に籍を置く者はアカデミーと

言う学校を卒業し、初めて下忍に成る資格を貰えるのじゃ。
ナルトはこの六年間、旅に出ていたとはいえ籍は木ノ葉に有る、じゃからアカデミーを卒業せんと忍には成れんぞ？」
ホムラが、さも当り前の事を言うように話す。
「・・・・マジ？」
「大マジじゃ」
ナルトの問いにホムラが即答する。
”キッ”
ナルトはこの事を教えてくれなかった自来也を睨むが・・・・
「・・・・・・」
自来也の目も点に成っていた。
この時、ナルトは察した。
（この人、本気で忘れてたんだな～）
ナルトは怒りを通り越して呆れた。
「じゃあ、これから何年もアカデミーに通わなくちゃ成らないの？」
ナルトは気を取り直して聞く。

「う～ん・・・これぱっかりはのぉ。
自来也、ナルトの方はどうなんじゃ？」

三代目が自来也に聞く。

「・・・・はいっ！？」

自来也は聞いていなかったのか、驚いたように聞き返す。

「じゃから、ナルトの勉強の進み具合と忍としての実力はどうなんじゃと聞いておる。」

三台目は再び自来也に聞く。

「あ、あぁ、はい、忍としてはワシや梁山泊の御仁達に鍛えて貰っていたので並みの中忍以上の事は出来るかと・・・ただ。」

「？ただ、何じゃ。」

歯切れの悪い自来也に三代目が聞き返す。

「いえ・・・勉学に関しては、シズネや梁山泊の峠越寺殿達に任せておったので、どのくらい出来るのかは、ちょっと・・・」

この言葉に三代目は・・・キレた。

「何をやっとったんじゃお前は！！！！自分で育てると言って置きながら人任せな上にどの位出来るのか把握までしておらんとは・・・このうつけがぁーーーー！！」

「・・・其処までにしておけ、猿飛。
ナルトが驚いているぞ。」

コハルの言葉に三代目は自来也の隣を見ると、そこには三代目の怒声に驚き、目を回しているナルトがいた。

「・・・・はぁ～、まぁ自来也には後でもう一度説教をくれてやるとして、実際勉強はどうなんじゃ？ナルト。」

三代目が落ち着きを取り戻し、改めてナルトに聞く。

「どうって聞かれても、よく分かんないよ。
ただ、じいちゃん達が持たせてくれた荷物の中に口寄せの巻物が入ってて、巻物の中にあった教科書と問題集に書いてあった問題は全部解いたよ？」

「ぜっ全部の問題をか！？」

これには三代目だけでなくご意見番の二人も驚いた。

たしかに自分達は、ナルトの荷物の中にアカデミーの教科書や問題集を入れたが、手違いで中忍や上忍に成るための試験の問題集が入っているのが旅に出た後で分かったからだ。

「ち、ちなみに正解率はどうなんじゃ？」

ホムラが恐る恐る聞く、この答えによってはナルトの学力は既に上忍クラスかもしれないからだ。

「峠越寺師匠に答えを見てもらったけど、特に間違えている所は無

いって。
あと、峠越寺師匠にテストも作ってもらったけど、ほとんど八十点くらいで百点はまだ取れて無いんだよね。」
そう言ってナルトはリュックの中から巻物を取り出す、何度も開いたのか、かなりボロボロに成っていたその巻物を開き印を組む。
《口寄せの術》
すると先ほどまで何も無かった巻物の上に、どっさりとテスト用紙や教科書、それに問題集が現れた。
三代目達は恐る恐るテストを手にとって見る。
そこには自分達でも解るかどうかと言う問題が書かれ、答えには赤ペンで○や×が書かれており、かなり良い点数と物によっては花丸が書かれていた。
三人はそうそうにテストを元に戻し、考える。
ナルトの学力は、既にアカデミーのレベルでは無かったので何年も在学させるのは却って良くないのでは、と判断したため別の案を考えている。
「・・・そうじゃ。」
三代目が何か閃いた様子。
「試験をしよう。」

「試験？」

ナルトが問う。

「うむ、ナルトには後日、勉学と戦闘の二つの試験を受けて貰い、その結果によっては、最終学年に編入と言う形で入学すれば良い、ただ時期的にナルトより一つ歳下の子達と同じ学年じゃがの。じゃが、これならばアカデミーに入学し、なお且つ、上手くいけば一年で卒業出来る。どうじゃ？良い案じゃろう。」

「それしかないか・・・」

「まあ、妥当た所かもしれんの。」

三代目の案にご意見番の二人も同意する。

「どうじゃ？ナルト。」

三代目がナルトに聞く。

「・・・・うん、良いよ。実はオレも、さっきの話を聞いてから、アカデミーに行って見たかったんだよね。」

ナルトが照れ臭そうに言う。

「そうかそうか。よし！早速準備せねば。」

ナルトの今後の方針が決まった。

少年編　第四幕　報告と方針（後書き）

祝！！この小説初の「忍術」それは・・・

《口寄せの術》（紙を）！！・・・ＯＴＬ

これはあれか、僕の小説が紙同然に薄っぺらいと言う暗示なのか・・・

次回はナルトの住む家についてです。

ナルトは本格的に化け物（頭脳的にも）に成りそうです、自分の腕でちゃんと表現出来るのだろうか？

少年編　第五幕　残した物

ナルトの今後の方針は「アカデミーに入学するための試験を後日受ける」と言う事に決まった。

だが、もう一つ重大な問題が有る事に気づいたコハルが、ナルト達に問いかける。

「ところで、試験は良いが、いったいどこに住む気だ？ナルト。」

「・・・・どこに住むって・・・何が？」

コハルの質問の意味がナルトはよくわかっていない様子。

「だから、お前がこれから「住む家」の事だよ。」

「・・・・・どこ何だろう、オレの家。」

ナルトは質問の意味は理解したが、その答えを持っていなかった。

「・・・・」

”チラッ”

ナルトは、ほぼ無意識に自来也を見る。

「・・・・」

ナルトは自来也と目が合った・・・が

”フルフルフル”

自来也は首を振る、即ち・・・住む家が、無い。

「・・・・い、今からでも、探せばきっと良い部屋が・・・」

ナルトが淡い希望を持って言う・・・が。

「ちなみに、今の木ノ葉で部屋を借りるなら、少なくとも二十万は掛かると思うが、そんな金が有るのか？」

”ズーン”　　ＯＴＬ

その希望も、コハルの言葉で一気に崩れてしまった。

何故なら、ナルト及び自来也の懐は、現在、氷河期まっただ中なのである。

しかし、自来也達にも収入が無い訳では無い。

彼はその名を世界に轟かせる「伝説の三忍」の一人であり、同時にコアなファンが多い「イチャイチャシリーズ」と言う十八禁小説の著者でもある。

主な収入は、自来也個人に来る依頼や小説の印税等、ナルトの方も自来也の依頼を手伝ったり、またナルトも、自身の趣味が自来也程では無いが、収入に繋がっている。

そのため、つい先日まで二人の懐は真夏の様に暖かかったのだが・・

・

彼らの懐が極寒に成った理由は、大きく上げて三つある。

一つ目は、木ノ葉に来る前に泊まっていた旅館の宿泊費、一週間分。

二つ目は、その旅館がある比較的大きな町での買い物。

（ナルトの服や装備一式、巻物等の新調。　ナルトの趣味に必要な道具、自来也の小説を書くための道具等々。）

三つ目、これが恐らく一番の原因なのだが、その町で自来也が毎晩「豪遊」した時に請求された酒代。

以上が、ナルト達の懐を氷河期にした理由である。

ちなみに、二人は何が何でもこの事（豪遊の件）を三代目達に言わないように約束をしていた。

自来也は言わない、なぜなら、この事（豪遊の件）がばれれば確実にこの三人にどやされるからだ、良い年をした大人が叱られるなど（もう既に一回怒鳴られているが・・・）非常にかっこ悪い、だから言わない。

ナルトは言わない、なぜなら、自分達が無一文同然になったのは、自分の責任もあるが、特にこのエロ仙人の酒癖と女癖の悪さから来ているなど、情けなくて絶対に言えない、たとえ、この三人がこの人の事をよ～く知っていようと言えるはずもない。

故に知られたくない理由は違えど「この事（豪遊の件）はお互い墓場まで持っていこう」と言う約束が、数日前に交わされた。

閑話休題。

肩を落としているナルトの頭に「野宿」の二文字がよぎる。

実は、ここ数日、懐の事情で野宿が当り前に成っていた、さすがに「汚いままで里には帰れない」と言う事で念入りに「水浴び」をしてきたが・・・

やはり、きちんとした布団で眠りたいし、男が言うのも何だが風呂にも入りたい。

如何したもんかと考える。

ちなみに、ナルトの頭には「三代目達の家で世話に成る」と言う選択肢は無い、これまで三代目達には散々迷惑を掛け、その上、宿や食事まで用意してもらっては、情けなさすぎるからだ。

しかし、部屋を借りる金も無いし、本当にどうしたら良いのか分からない。

最悪、纏ったお金が手に入るまで、また野宿で凌ぐか、そんな事を考えていると不意に三代目が口を開く。

「あるぞ？タダで住める家が。」

「「・・・！？」」

”バッ！！”

思考の海に潜っていたナルトと自来也が三代目の方を勢いよく向く。

「ほっ本当！じいちゃん。」

ナルトが三代目の詰め寄りながら聞く。

「あぁ、本当じゃよ。」

三代目は笑いながら肯定する。

「しかし、そんな家がいったい何処に・・・」

自来也は心当たりが無いのか、再び考える。

「何じゃ自来也、忘れてしもうたのか。
ミナトが建てた「あの家」じゃよ。」

「あ、あ～～～～～～～！！！！！」

その言葉に自来也が叫ぶ。

「やっと、思い出したか・・・」

三代目が呆れたように言う。

「ねえじいちゃん、「あの家」って？」

ナルトが不思議そうに聞く。

「「あの家」とはお主の父親が生前建てていた家の事じゃよ。」

三代目は優しい顔で答える。

「父さんが建てた家・・・」

「ああそうじゃ、あ奴らは一度も住んだ事は無かったが、お主の父親が建て、これまでわしが管理してきた。
じゃからまだまだ綺麗な状態で残っておる、お主が好きに使っていいぞ？ナルトよ。」

「・・・・・・」

これを聞きナルトはまた沈んだ顔に成る。

「？どうしたナルト。」

「うん、オレって全然ダメだなって、またじいちゃんに迷惑掛けて、しかも世話に成っちゃう。」

”コツン”

「イテッ」

それを聞いた三代目はナルトの頭を小突く。

「何を言っとるんじゃ、前にも言ったじゃろう、お主の事で迷惑を感じた事など無い。
家の事は、お主の父が死んでから、あの家の名義はわしの物になっとった、じゃから、わしが勝手にあの家を管理し、元の持ち主の息子であるお前に返すと言っておる、すべてわしが勝手に行なった事

だ。
それに、一度住んでみて嫌だと思ったならば返してくれて構わんぞ？また別の部屋を借りても良いしの。」

「じいちゃん・・・」

三代目の言葉にナルトは嬉しくなる、この人は、あの時のままだと言う事がわかったからだ。

「さぁ、そろそろ「家」に行って見てはどうじゃ？もういい時間じゃしのぉ、家の場所は自来也が知っているはずじゃ・・・のぉ？自来也。」

三代目が自来也に聞く。

「もちろん覚えていますぞ！・・・イヤ、正確には思い出したと言うべきか、ハハ、フハハハハハ！！」

「はぁ～、まぁ良い、ほれこれが鍵じゃ、無くすでないぞ。」

「うん、ありがとう、じいちゃん。」

自来也が誤魔化す様に笑い、三代目はまたも呆れながら、机の引き出しに入っていた鍵を取り出しナルトに渡す。

「試験については後日、使いの者を寄越す、それまで里を見て回ってはどうじゃ？」

「うん、そうするよ。」

「試験が終わるまでは、ワシも木ノ葉に残るからのぅ、心配するな。」

何が「心配するな」なのか今一つよく分からないが、まあ良いだろう。

「おおそうじゃった、忘れるところだったわい、ナルト待ちなさい。」

部屋を出て行こうとするナルトを三代目が引きとめる。

「これも返そうと思っとたのをすっかり忘れとった。」

そういって三代目から手渡されたのは「うずまきナルト」と書かれた通帳だった。

さすがにお金まで貰うのは、と言おうとしたナルトだったが、三代目に遮られる。

「勘違いするで無いぞ、この通帳もお主の父がお主の為に作った物じゃ、六年前に渡しても良かったんじゃが、あの時は綱手が居たからのぉ・・・たしかに返したぞ。」

「・・・何から何まで本当にありがとう、じいちゃん。」

「無駄遣いをするで無いぞ。」

「大丈夫、オレは綱手先生とは違うから。」

「そうかそうか。」

そう言って三代目は笑っていた。

「それじゃあ、じいちゃん、またね！」

「ああ、気をつけて行くんじゃぞ。」

「うん！」

そう言ってナルトと自来也は部屋を出て行った。

「随分と騒がしかったのぉ。」

「なに、これからもっと騒がしく成るぞ？」

ホムラとコハルも嬉しそうに言う。

窓の外には夕陽が沈みかけていた。

少年編　第五幕　残した物（後書き）

今回はやたらと同じ言葉、同じ言い回しが多かったかも・・・

じゅ、１０万?・・・・・これはあれかな?見てくれた人が１０万人って言う事なのかな?・・・

ありがとございますっっ!!!!

感無量です!!

少年編　第六幕　「家」

火影の屋敷を出たナルトと自来也は木ノ葉の大通りを外れ、川を渡った先に数軒の家が立ち並ぶ、静かな住宅地を歩いていた。

「着いたぞ、ここだ。」

自来也が一軒の家の前で立ち止り、指をさす。

「・・・・」

ナルトが指の先を見ると、そこには、築十年以上とは思えないほどに綺麗な家が有った。

「この家が、父さんの家・・・」

「正確には、ミナトとクシナ、それにお前との三人の家だ。」

ナルトの言葉を自来也が訂正する。

「意外と見た目は普通なんだ。」

ナルトの家の第一印象は「普通」だった。

しかし、それも仕方がないのかもしれない、たしかに見た目はごく普通の一軒家なのだから。

「フッ・・・ワシも初めてお前の父に半ば無理やりこの家を見せられた時、同じ事を言った。　「火影とその家族が住む家にしては、

普通すぎる。」とな。
しかし、お前の父はワシにこう返してきた。　「火影とその家族とは言え、僕達も木ノ葉の住人です、だから僕達だけ特別扱いはされたくないんです。それに、この方が里の人達と毎日挨拶が出来るでしょ？」とな・・・」

自来也の思い出話を聞き、ナルトは苦笑いを浮かべる。

「はは・・・・でも、本当に好きだったんだ、この里と此処に住む人達が。」

ナルトは、自来也達が話してくれる父の話を聞き、その都度思う、自分の父親は、本当に木ノ葉を愛していたのだと。

「・・・・・考え事は後にして、さっさと入るぞ？もう日が暮れそうだ。」

「・・・はいはい、わかりました。」

父の事を考えていたのだが、自来也に急かされ、ナルトは先ほど三代目に渡された鍵を取り出す。

”カチャ・・・ガチャッ”

鍵を開け、扉を開けて中に入る。

二人は玄関で履物を脱ぎ、廊下を進んだその先にある居間の扉を開けて中に入る。

部屋の中には、三代目が用意してくれたのかテレビや冷蔵庫等の家

電、そしてテーブルやソファー等の家具一式が塵一つ無い状態で備え付けられていた。

「水道、ガス、それに電気も来ている・・・どうやら、三代目があらかじめ手配していてくれたようだのぅ。」

「・・・・・」

自来也が家の中を調べ、必要な事を教えてくれたのだが、ナルトは返事をせず居間の真ん中に立ち、この家の事を考えていた。

最初、この家に入り感じた事は「なんだか、寂しそう。」と言う物だった。

物は有っても、人の気配が無いこの部屋は”ガラ～ン”としていて、まるで外の世界から切り離された空間、そんな印象を持った。

・・・この家も、一人だったのだろうか・・・自分と同じように、イヤ、自分よりも長い時間、ずっと一人ぼっちで寂しかったのだろうか・・・そんな事がナルトの頭に浮かぶ。

たぶん「家の掃除の為に来た」と言う人は多いのかもしれない、だが「この家に住んだ」と言う人は今の今まで一人も居なかったのだろう、それは三代目が自分に配慮してくれた結果だろう・・・しかし「人が住んで居ない家は家では無い、ただの箱だ。」と昔読んだ小説に書いていた気がする。

まさしくその小説の言葉通りだと思った、この家は、まだ本当の意味で家じゃ無い、ただの箱だ、中身の無い空虚な箱・・・

「同じだのぅ。」

「・・・・！」

考えに耽ってたところに、自来也の呟きが聞こえた。

「同じって？」

ナルトが振り向き、自来也に聞く。

「お前が今立っているその場所に、ミナトも立っていたんだよ。」

自来也の顔が優しげに、しかし寂しそうに微笑んでいた。

ナルトは、旅の間に自来也達から両親の話をたくさん聞いた、その中でもあの顔をする時は、彼の中でも特に印象に残っている話をする時の顔だと言う事をナルトは知っている。

自来也は話を続ける。

「さっき話しただろう、お前の父親に半ば無理やりこの家を見せられたと、その時、ついでだからと家の中まで案内されてな・・・案内し終わった後、ミナトはこの部屋に戻り、今お前が立っているその場所で、さっき言ったやり取りをしたんだ。」

（この場所に父さんが・・・）

ナルトは自分の足元を見る。

「実は、先ほどのミナトの言葉には続きがあってのぅ。」

自来也の話はまだ終わっていなかった。

「続き？」

「あぁ・・・あの時、ミナトは続けてこう言った　「でも先生、僕は特別扱いされるのはイヤですけど、特別には成りますよ。僕達家族は里一番、いや世界で一番の家族に成るんです！！この家はその為の大事な家なんです、この家は、大切なもう一人の家族なんですよ！」とな・・・」

「・・・・・」

自来也の話を聞き、ナルトの中に新たな決意が生まれた。

この家を本当の意味で「家」にしようと。

たしかに、ここは今までただの箱だったかもしれない、一人ぼっちで寂しかったのかもしれない。

でも、これからは違う。

これからは、自分がこの家に住み、この家の家族になろうと、ナルトはそう決意した。

ナルトにはこの家と「家族」に成れる自身が有った、何故ならこの家は、ナルトにとって「兄弟」なのだから。

「・・・考えは纏まったか？」

師には自分が何を考えているのかお見通しの様だ。

”コクン”

自来也の問いにナルトは静かに頷く事で答えた。

「そうか・・・ならばワシから言う事は何も無い、お前のやりたい事をやると良い。

さてっ！もう少しだけこの家を調べたら、どこかに飯を食べに行こう！さすがに、これから食材をかって調理していては、時間が掛かるからのぅ。」

そう言って、自来也はお腹に手を当てる、すると彼のお腹から”グゥ～”と大きな音が聞こえた。

既に日も暮れて月が昇り始めたころ、ナルトと自来也は木ノ葉の大通りを歩いていた。

あの後、手短に各部屋を調べ、ベッドや布団などの寝具を発見し今夜の安眠が保証されたところで「家探索の続き、それから他に必要な物があれば明日買いに行こう。」と言う事に成り遅めの夕食を食べるため、二人はとある店を目指していた。

「おお！此処だ此処だ。」

自来也に案内された場所には一軒の店があり暖簾には「ラーメン一楽」と書かれていた。

「さあ、入るぞ？」

自来也は足早に店内に入る。

ナルトもそれに習い暖簾を潜る。

「！！」

ナルトの鼻にラーメン屋独特の香りが入ってくる、その香りはラーメン好きのナルトが今まで様々な町に立ち寄り、食べて来た店の中でも一番良い香りがした。

しかし、ナルトにはそれ以上に驚く事があった。

それは、幼い頃にこの香りを嗅いだ事があるからだ。

「へい！いらっしゃいっ！！！」

とても威勢のいい、そして、とても懐かしい声がナルトの耳に響いた。

少年編　第六幕　「家」（後書き）

更新が遅くなってしまって申し訳ありません、早くもスランプなのでしょうか・・・これからも、さらに遅くなるかもしれませんが、どうか気長にお待ちください（土下座）。

今回も、一段と話しが飛躍と言うか飛んでいますね・・・ごめんなさい、後、家具や家電をそろえたのは良くなかったかな～と思いますが、ナルトの木ノ葉での買い物の話を書きたかったので、家具などは既に三代目に用意して頂きました。

ちなみに、三代目はナルトを溺愛？しています、ご意見番の二人もかなり可愛がっていますが、三代目はそれ以上です。

ナルトの家についてですが、ナルトの家の位置は「ナルティメットストーム」の木ノ葉マップを参考にしています。

少年編　第七幕　思い出～迷子～

「へい！いらっしゃいっ！！」

店の外にまで聞こえる声で、店主は迎えてくれた。

「相変わらず、威勢がいいのぅ、テウチ。」

自来也は、昔から変わらぬ店主「テウチ」に笑い掛ける。

「すいません、威勢とラーメンだけが取り柄なもんで・・・お二人さんですね、どうぞ、座ってください。」

その言葉にナルトと自来也がカウンターの席につく。

「はい、お冷をどうぞ。」

二人の前に、年頃の娘が水を置いてくれる。

「おお！これはまた、随分と可愛らしい娘さんだのぅ・・・」

自来也が娘に鼻を伸ばす。

「おっと、いくら自来也様でもアヤメはやれませんよ！何たって俺の大事な一人娘なんですから。」

「じょ、冗談だ、そんな本気にするな（汗）」

自来也の態度にテウチは臨戦態勢を取り、自来也は少々本気でビビ

る。

「もう、お父さん！！・・・すいません、父が失礼な事を。」

アヤメは客である自来也に謝る。

「イヤイヤ、ワシの方こそ、どうもすまんかったのぅ。」

自来也も素直に詫びる。

「いえ、こちらの方こそ本当にすいませんでした・・・・・ところで、自来也さん、でよろしかったですか？お話はいつも父から聞いています、とてもすごい忍なんですよね？」

「いや～そんな「すごい」だなんて、照れるの～。」

アヤメが自来也を誉めると、自来也もそれを素直に受ける。

「フフッ・・・えっと、そちらの方は？」

「ああ、こいつは・・・」

「うずまきナルト・・・だろ？」

「・・・」

アヤメの疑問に自来也が答えようとすると、代わりにテウチが答える。

ナルトは名前を呼ばれると、少しだけ顔を下に向ける。

「・・・大きくなったな、坊主。」

「え？」

テウチの言葉にナルトの顔が上がる。

「覚えていてくれたんですか？」

ナルトは意外な物を見るように、テウチを見る。

「当り前よ、こちとら客商売だ客の顔と名前は全員覚えてるぜ？」

「お父さん、この子ウチに来た事あるの？」

テウチがナルトの事を知っていたのが意外だったのか、アヤメはつい素に戻って聞いてしまった。

「ああ、最後に来たのは、まだこいつが小さい頃だったが、よ～く覚えてるよ。

何たって、俺の「大事なお客さん」なんだからな。」

そう言って笑ったテウチを見たナルトは（あぁ、この人も本当に変わってないんだ、昔から）と一安心した。

「さぁ、お二人とも注文をどうぞ？」

「そうだのぅ～・・・ワシは醤油を頼む。」

「じゃあ俺は・・・・・「味噌チャーシュー」で。」

自来也は醤油を頼み、ナルトは味噌チャーシューを頼んだ、ナルトにとって特別なラーメンを。

「へいっ！醤油お一つ、味噌チャーシューお一つですね、少々お待ちを。」

注文を受けると、テウチは手際良く調理を始めた。

「・・・」

その背中を見て、ナルトは嘗て一度だけこの店に来た時の事を思い出していた。

木ノ葉でも指折りのラーメン屋「一楽」、お昼を過ぎた時間でも客の出入りが多いこの店を、一人の少年が物陰からじっと見つめている。

うずまきナルト、当時六歳。

どうしてナルトが「一楽」を見ているのか、事の始まりは今から一時間ほど前にさかのぼる。

よく晴れた昼下がり、ナルトは何時もの様にお昼ごはんを食べ終え、自室に戻り三代目達に与えられた絵本やおもちゃで遊んでいた。

子供が家の中、たった一人で遊ぶなど不健康極まりないが、別にナルトは外出を禁じられている訳では無い、寧ろ三代目達は「友達と

外で元気に遊んで欲しい」と思っているのだが、現実は上手くはいかない。

以前、ナルトが一人で外に出て見たところ、里の大人達に見つかり酷い目にあった事がある、その後も何度か外に出ては見たのだが、その度に大人達やそれを見ていた子供達までもがナルトに危害を加えたのだ。

その為ナルトには友達など一人もおらず、外出も三代目達と一緒の時か、比較的人が少ない朝か夕方にしか出なくなてしまった。

（ちなみに、ナルトに危害を加えた里の大人達には、三代目によりきつい罰が下ったのは言うまでもない。）

そんな事があったにも拘わらず、何故ナルトは外に出たのか。

それは・・・鳴き声が聞こえたからだった。

ナルトはいつも、暖かい日は自室の窓を開けている事が多く、この日も窓を開けていたのだが、そこに”にゃ～”と言う、今まで聞いた事の有る物とは少し違う感じの、どこか辛そうな鳴き声が、ナルトの耳に入ってきた。

不思議に思ったナルトは窓の外を見る、そこには、足から血を出した猫が道端に倒れていた。

（あの猫、怪我してる）

そう思ったナルトは、何かあった時にと自室に置いてあった消毒液と絆創膏を持って、外に飛び出した。

余談だが、ナルトは何故か動物に好かれやすい、其のせいかナルト自身も動物達の事が大好きだ、動物達が怪我をしていれば何とかしてあげたいと思うほどに、たとえその行いをして外に出た結果、自分が何かされても良い、と思うほどに。

外に出たナルトは、先ほど猫が倒れていた場所に行く、するとやはり猫は怪我をしているのか自分の足をペロペロと舐めている。

「・・・・」

「！フーーッ！！！」

”ヒュッ！”

「あっ！」

ナルトは猫の怪我を見ようと近づいたのだが、猫はナルトの事を自分を傷つける者と判断したのか、ナルトに威嚇をして路地裏に走り去ってしまった。

「待って！！」

それを見たナルトも猫の後を追いかけ、路地裏に入ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・あ！いた！！」

二十分も歩くと、先ほどの猫が塀の隅でまるまっていた、怪我のせいかあまり遠くまではいけなかった様だ。

「！フーーッ！！」

やはり猫はナルトを警戒しているのか、再びナルトに威嚇する。

「・・・・・大丈夫だよ。」

ナルトは徐に口を開く。

「ぼくは、君をいじめないよ？だから、大丈夫だよ。」

ナルトがそう言い笑うと、少し前まで威嚇していた猫が突然威嚇を止めナルトの方に歩み寄ってきた。

「ミャ～」

ナルトに近づいた猫が一鳴きする、その声は先ほどの辛そうな物でも、威嚇のための物でも無い、ナルトに心を開いたのか、とても安心した様な声だった。

「ありがとう・・・じゃあ、少し足を見せてもらうね。」

そう言ってナルトは猫の足を見る、そこには何かで切った様な傷があった、おそらくガラスの破片か何かで傷を負っていまったのだろう。

「ちょっとだけしみるけど、ガマンしてね。」

ナルトは傷口に消毒液をたらし、絆創膏を貼る。

その間、猫はさっきと打って変わって大人しく手当を受けていた。

「・・・・はい、おしまい。」

手当が終わり足から手を離すと、猫は軽やかににジャンプして塀の上に上る、そして「みゃ～」と鳴いて走り去っていく。

〈ありがとう〉

ナルトには、猫がそう言ってくれたように聞こえた。

「・・・・あれ？」

暫く猫が走って行った方を見ていたナルトは、不意に思った。

「ここは・・・どこ？」

うずまきナルト、人生初の迷子である。

少年編　第七幕　思い出～迷子～（後書き）

ちょっと短いかな？それとも、いつもこのくらいだったかな・・・。

思い出編は次回に続きます。

猫の威嚇とか分からん！！・・・でもこんな感じだと思うのですが、どうなんでしょう。

少年編　第八幕　思い出～疑問と知らぬ事実～

六年前のある日、ナルトは自室の窓から傷ついた猫を見つけた。手当をしようと猫に近づいたのだが、猫は警戒して路地裏に逃げてしまった。

それを見たナルトも猫を追って路地裏に入り、しばらくして猫を発見、その後猫の心を開く事に成功し、手当をしたのだが・・・

（ここは、どこ何だろう。）

ナルトは、迷子になっていた。

”キョロキョロ”

ナルトは辺りを見回すが、自分がどっちの方から来たのか分からないでいた。

それもそのはず、ナルトは一刻も早く猫を見つける為、路地裏をぐるぐると歩きまわって探していたのだ、それに幼いナルトにとっては、たかが路地裏でも迷路の様に思えたし、木ノ葉は忍の隠れ里、複雑なのは当り前とも言える。

（早く、かえらなきゃっ。）

猫を手当していた時は落ち着いていたナルトだが、今は逆に不安と焦りが見えていた。

（あっちから、声が聞こえる。）

ナルトは聞こえた声の方に向かって歩き出す、この狭く薄暗い場所から出るために。

・・・・・どれくらい歩いたのか、二十分いや三十分？どちらにしても、ナルトにとっては先ほどの猫を探していた時よりも長く感じられた。

「！！」

足もかなり疲れ出してきたころ、ナルトの目に一筋の光が見えた。

出口だろうか、ナルトは一目散に光に向かって走る。

「ハァハァ・・・！！」

しかし、出口寸前でナルトは急に止まり、脇にあったゴミバケツの後ろに隠れる。

何故なら出口の先に里人が見えたからだ。

此処に来てナルトは自分が今、屋敷の外にいる事を思い出す。

猫を助けるために飛び出した時は分かっていたのだが、路地裏を歩いている時は当然誰にも会わなかったので、すっかり外にいる事を忘れてしまっていた。

「・・・」

ナルトは、このまま出て行くべきか迷っていた、このまま出て行けば里人に見つかり酷い事をされるのは目に見えている。

だが、外に出た時覚悟はしているはずだった、猫を助けるためなら、酷い事をされても良い、そう思っていたが、やはりいざ何かされると思うと足がすくむ。

「・・・・よし！」

このまま路地裏に戻ってもさっきと同じ事の繰り返しだ、そう思ったナルトは一歩前に足を踏み出す。

すると。

「まいど！！ありがとうございましたっ！！」

”ビクッ”

ナルトの耳に辺り一面に響く大きな声が聞こえ、店の中から大人が出てきた、それに驚いたナルトは踏み出した足を戻し、またゴミバケツの後ろに隠れてしまう。

「・・・・」

ナルトは、おそるおそる声のした方を見る、そこには「ラーメン一楽」と書かれた暖簾があった。

（らーめん？）

ナルトの頭に以前、本で見た事のある料理が浮かぶ。

（あれって、食べ物だよね・・・じゃあここは、らーめんをうっているお店？）

ナルトがそんな事を考えている間にも、客は次々と店に入ったり、店から出てきたりを繰り返している、その度に店の中から「いらっしゃい！」や「ありがとうございました！」等の掛け声が聞こえる。

しかし、声が聞こえるのは店の中だけでは無かった。

店の外、ラーメンを食べ終えた客も「ごちそうさん、うまかったよ！」や「オヤジ、また来るから！」と店の中にいる店主に向かって笑顔で言い、そのまま、幸せそうに帰っていた。

だがここで、ナルトに疑問が浮かび、考える。

曰く「ごはんを食べて、どうしてわらってるんだろう。」と・・・

普通の、それも幼い子供が何を言ってるんだ、そう思う者も多いだろう、だがそれも仕方が無いのかもしれない、ナルトにとって食事とは楽しい物では無く、ましてやご飯を食べて美味しい等と思った事すら無いのだから。

では、どうしてナルトは食事に魅力を感じないのか、理由は大きく分けて二つ。

一つは環境、ナルトは食事をいつも一人で食べていた、三代目やご意見番の二人もなるべく時間をつくり、ナルトと一緒に食べようとはしているのだが、常に多忙でそれもできない、どんな料理もたった一人で食べてもあまり美味しくは無いだろうし、当然楽しくも無

い。

だが、それ以上に二つ目の理由が厄介だ、何故なら問題はナルトでは無く、もっと別の所にあるのだから。

時に、ナルトの食事は誰が用意しているのか、ナルト自身か、否、幼いナルトには料理など出来るはずも無い、そもそもナルトはまだお湯すら沸かした事が無い。

では、三代目或いはご意見番の二人か、否、三人も作ってあげたいと言う気持ちはあるのだが、常に多忙で何より時間が無い。

では、一体誰が作っているのか、答えは簡単「里の人間」だ。

至極当然の事だが、ナルトにとってはこれが一番の問題だろう、何せ里の者達はナルトの事を「里を襲った、憎き化け物」と思っているのだから。

だが里の人間全てがナルトの事を憎んでいるわけでは無い、ナルトの真実を知る者やナルト自身を見てくれる人もごく一部だがいる、しかし大多数の里人がナルトの事を「憎い」と思っている事も、中には「殺したい」と思っている事もまた事実なのだ。

考えてもみてほしい、ナルトの為に料理を作る、と言う事は自分達にとって「憎い存在」の空腹を満たし、満足させ喜びを与えると言う事に他ならない、だが自分が憎いと思っている相手に、殺したいとまで思っている相手にそんな喜びを与えたいと思うだろうか、普通は思わないだろう、そして、ナルトの食事を用意している者、名前は記さないが彼女もそう思わない人間、つまりナルトに憎しみを覚えている者の一人だった。

では一体、彼女はナルトに何をしたのか・・・

彼女がナルトの食事担当に成った時、始めに彼女が思ったのは、どうすればナルトを苦しめられるのか、と言う物だった、その時に考えたのは料理をつくらず、ナルトに空腹の苦しみを与える事だったのだが、これでは三代目達にばれた時自分が罰せられてしまう、そう思った彼女は次の手を考える。

そして考え付いたのが、極限まで不味い料理をつくる事だった、これなら仮に三代目達に見つかっても「作り方を間違えた」と言えば、そこまできつい罰はくだらないだろうと考え、その上、不味い料理なら勝手に食べずにいて空腹を与えられるし、たとえ食べたとしても味覚で苦しめられて一石三鳥だとして、それを実行に移した。

結果的には彼女の思惑通りになった、食事をナルトのもとへ運びに行く度にナルトは心底嫌そうな顔をしていたし、食べ終えた食器を片づけに行けば、やはり辛そうな顔をしていた、ただ一つ気に成る事が有るとすれば、食器を片づけに行った際、偶にナルトが自分の体を抱えて、苦しそうに呻いていた事があるくらいなのだが、むしろ「良い気味だ、もっと苦しめ」と気にも留めていなかった。

だが、この時の彼女は知らない、自分の酷い行いが、更に残酷な行いの手伝いをしてしまっていた事に・・・

「オイ、そこの坊主。」

「！！」

ナルトが「何故ごはんを食べて笑顔に成るのか」と言う事を考え込

んでいるところに、突然掛けられた自分への言葉、上を見上げると、
其処には前掛けをした強面の男性がこちらを覗き込んでいた。

少年編　第八幕　思い出～疑問と知らぬ事実～（後書き）

また遅くなってしまいました、すいません。

今回出てきた彼女の策、普通は成功するはず無いんですけど、そこはご都合主義って事で許していただければ。

なんだか自分の小説ってやたら同じ言葉を使っていますよね、（特にナルトとか、ナルトとか）読みづらいかな～とは思っているんですけど、どうじたもんか・・・名前の頭文字をかっこの前に付けるとか考えたんですけど、どうにもしっくりこなくて。

やっぱりちゃんとした小説の勉強をした方がいいのかな、って言うかそもそも勉強した事無いのに書いてる方が問題か・・・

少年編　第九幕　思い出～店主の一日～

「「・・・・・」」

後少しで夕方に成ろうかという時間、二人の人間がお互いをジッと見ていた。

一人は、決して良くは無い意味で有名な金髪の少年。

もう一人は、ラーメンという料理に、並々ならぬこだわりを持つ指折りのラーメン屋の店主。

「（声を掛けたは良いが、どうしたもんかな～・・・）はぁ～」

”ビクッ”

「ん？」

”うるうる”

「・・・はぁ～・・・」

二人とも言葉も無く、見つめあっていると店主が困った様にため息をつく。

すると少年は店主のため息に反応し、それに気付いた店主が少年を見ると、目を潤ませてこちらを見ており、また店主はため息をつく。

（どうして、こんな事に・・・）

そう思い、店主は今日一日を振り返る。

「今日は良い一日に成る」

朝、何時も通り太陽が昇る前に起きたラーメン屋「一楽」の店主、テウチの一日は、清々しい目覚めとそんな予感から始まった。

何時もの様にラーメンの仕込みと開店の準備を済ませ、何時もの様に愛娘のアヤメを起こし二人で朝食を取り、何時もの様にお昼前に店を開けた。

だが、店を開けた時、店の前は何時も通りでは無かった。

何時もはこの時間に店を開けても来る人は少なかったのだが、今日に限って店の前には長蛇の列が出来ていた。

そして、ここからテウチの戦いが始まった。

何時もは、娘のアヤメが「手伝いたい」と言っても「まだ、早い」と断ってきたテウチだが、今日はまさしく猫の手も借りたいという程に忙しい、その忙しさは昼時を過ぎても続き、これは一楽始まって以来の事だった、と後の彼は語る。

（しかし、一体どうしてこんな急に・・・ん？）

注文の味噌ラーメンをつくっている最中、そんな事を考えていると、客が持ってきたであろう一冊の雑誌を見つける。

（そういえば・・・）

テウチは思い出した、つい先日、木ノ葉の雑誌記者が来て「ラーメン特集をくみたい」と取材に来た事を。

そして、自慢の味噌ラーメンを食べた記者が「これは旨い！！」と絶賛してくれていた事を。

おそらく、あの雑誌にはその時の記事が書かれているのだろう、しかも今日は世間一般的に休日というやつである、その事が、より一層拍車をかけているのだろう、とテウチは結論づけ、またラーメン作りに戻った。

それから、数時間後。

何とか全員分のラーメンを作り切り客も全員満足して帰ったので、テウチはやっと休憩を取る事が出来た、そして忙しすぎて確認できて無かった、麺やスープの残りを見る。

「！！」

其処には、後五杯分ほどしか無いスープ、そして麺も僅かに三玉しか残って無かった。

これにはさすがにテウチも驚いた、何せストックしてあった麺は明日の分もあったのだから、つまり今日一日で二日分の売上を出したという事に成る。

「・・・・」

しかし、売上が通常よりも大きく上回ったにも拘わらず、テウチの顔は晴れやかでは無かった。

それもそのはず、このままでは夜に来てくれるお客さん達に、ラーメンを出す事が出来ない、テウチにとって売上はもちろん大事な事だが、それよりもラーメンを食べたいと思って来てくれる人達に自分のラーメンを作って食べてもらう方が大事なのである。

だが、いくらなんでもこの麺とスープでは営業は不可能、新しく用意したくても今から材料を買いに行き、一から作っていては間に合わない。

全ての準備が整うにはどうしても、明日いっぱい使わなくてはならない。

「しょうがねぇ、今日はもう店じまいだな・・・」

テウチは苦渋の決断を下す、仕方がない事だとは分かっている、だが、今日の夜それに明日のラーメンを楽しみにしている人達には、申し訳ないという思いが強い。

「どれ、下げるか・・・」

何時もよりかなり早いが、暖簾を下げるために外に出る、すると。

「・・・ん？何だありゃ・・・」

テウチが店の外に出てみると、路地裏の方に光る何かを見つけた。

「・・・」

近づいてみると、それは髪の毛のようだ、それも木ノ葉では珍しい「太陽」のような金髪の。

さらに近付くと、その金髪の持ち主は少年のようだ、しかも木ノ葉では知らぬ者が居ない程の有名人の・・・

「・・・っ！！」

テウチは声を上げそうになるが、咄嗟に手で口を覆う、どうやら向こうは何か考え事をしているようで、こちらには全く気付いていない。

（しかし、何だってこんな所に・・・）

テウチは、もしこの少年が自分の思った通りの少年ならば、こんな所にいるのはおかしいと思った、何故なら、自分が外に出れば里人にどんな事をされるのかを少年は身をもって知っているはずだ、と考えたからだ。

「・・・・・」

テウチはこの少年の事が何故か気になった、それは「憎いから」や「化け物」等の意味では無く、単純に少年の事を知りたいと思ったからだ。

「・・・」

テウチは少し勇気をだして、少年に話しかける。

「オイ、そこの坊主。」と・・・

そして、今現在に至る。

（はぁ～、本当にどうしたらいいんだ？）

テウチは、少年に声を掛けた事を少しばかり後悔し、この後どうすればいいのか途方に暮れていた。

・・・”くぅ～～”・・・

少年の腹から、可愛らしい音が鳴る。

「「・・・・」」

”かぁ～～”

二人の間に気まずい空気が流れ、少年の頬が恥ずかしそうに赤く染まる。

「お前、腹減ってんのか？」

”コクリ”

テウチの問いに少年は頷く事で答える。

「ついてこい・・・ラーメン食わしてやるよ。」

そう言ってテウチは自分の店に入っていき、少年も後に続いた。

少年編　第九幕　思い出～店主の一日～（後書き）

今回も時間がかかってしまいました、どうもすいません。

今回はテウチ側の話でした、そのため、ナルトの事はまだナルトではなく、少年としました。

次回はナルト側に戻ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6529k/

NARUTO　木ノ葉を照らす太陽

2010年10月9日10時44分発行